

CHOTA No.1 TUMULUS

Archaeological Survey Report prior to the
Construction of Parking Space

山梨県笛吹市

長田1号墳

—駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

R·S·Business Inc.
Fuefuki City Board of Education
Yamanashi Research Institute of Cultural Properties

2014

有限会社アール・エス・ビジネス
笛吹市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

山梨県笛吹市

長田1号墳

—駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014

有限会社アール・エス・ビジネス
笛吹市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

例　　言

1. 本書は、山梨県笛吹市御坂町下黒駒字北長田に所在する、長田1号墳の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、第1次調査として工業団地造成に伴い、御坂町教育委員会が実施した。
第2次調査は、工業団地内における駐車場建設に伴い、有限会社アル・エス・ビジネスの委託を受けた公益財團法人山梨文化財研究所が発掘調査および整理作業にあたった。
3. 第1次発掘調査は、平成元年11月1日から実施した。
第2次発掘調査は、平成23年5月6日～6月20日まで実施した。
4. 本書の執筆・編集は、第1次調査担当者の野田昭人（笛吹市役所）ならびに望月幸和の協力を得て、宮澤公雄が行った。
5. 本書に掲載の遺構写真は、第1次調査を野田、第2次調査を宮澤が、遺物写真は中川美治、宮澤が撮影した。
6. 発掘調査および整理作業のうち一部の調査・業務について、以下の機関に委託ならびに協力を得た。

基準点・航空測量	株式会社シン技術コンサル（第1次調査）
	株式会社テクノプランニング（第2次調査）
鉄器・木器保存処理	公益財團法人山梨文化財研究所
7. 本書ならびに発掘調査に関する記録図面・写真・出土遺物等は、笛吹市教育委員会が保管している。
8. 本遺跡の発掘調査および整理作業にあたっては、以下の諸機関・各位から多大なるご指導・ご協力を賜った。ここに記して深く感謝の意を表する次第である。

笛吹市教育委員会、山梨県学術文化財課
小野正文、柳原功一、小林健二、鈴木一有、鈴木敏則、坂本美夫、橋本博文、土生田純之
9. 参考文献は、執筆者順に第4章末にまとめて掲載した。

凡　例

1. 遺跡全体におけるX・Y座標は、世界測地系平面直角座標第Ⅷ系のX = -41330.000、Y = 16510.000（北緯35度37分38秒、東経138度40分56秒）を基点（X = 0、Y = 0）とした座標値である。なお、各遺構平面図中に示す方位は、すべて座標北を示している。

なお、真北方向角は-0度6分22秒となる。

2. 写真図版中、第1次調査に関するものについては、キャプションに第1次調査と明記し、とくに表記の無いものについては、第2次調査によるものである。

3. 遺構・遺物実測図の縮尺は、以下の通りである。

遺構　墳丘 — 1/40、1/100　石室 — 1/40　遺物出土状況 — 1/20、1/30

遺物　土師器・須恵器・土器・縄文土器・陶器 — 1/3　金属製品 — 1/2

古銭 — 1/1　玉類 — 1/1　石製品 — 1/3

4. 遺構図版中の遺物分布図のマークは以下の通りである。ただし、マークの向きは平面図については北向き、垂直分布図は垂直方向を基準としている。

■ 土師器 ◆ 須恵器 ★ 縄文土器 ▲ 陶磁器 □ 土器 ● 金属製品・古銭

▲ 骨・歯

5. 遺物図版中で使用したスクリーントーンの凡例は、以下の通りである。

■ 赤彩 □ 黒彩 ■ 須恵器

6. 遺構同一図版中の標高は、原則として統一しているが、一部異なるものもあり明記してある。

7. 出土遺物分布図中の出土遺物実測図は、任意の縮尺であり統一していない。また、接合関係を表現した線のうち、実線は接合関係にあるもの、破線は直接接合しないが同一個体と判断されるものを表す。

8. 出土遺物のうち、鉄製品についてはさまざまな形状のものがあるため、部位の計測値についてはできるだけ本文中に記載したが、鉄錐に関する遺物観察表中における計測値は右図による。

9. 石室側壁および石室内の報告において、石室入口より奥壁へ向かい、右側を右側壁、左側を左側壁とする。

10. 遺構図版中および遺物観察表中の色調名は、農林水産省技術会議事務所監修

1990『新版 標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄)、尚学図書・言語研究所 1986『色の手帳』 小学館によっている。

11. 本書で用いた地図は、国土地理院発行の「石和」「甲府」(1:25,000)である。

12. 本墳については、以下の文献において概要を報告しているが、本書をもって正式な報告とする。

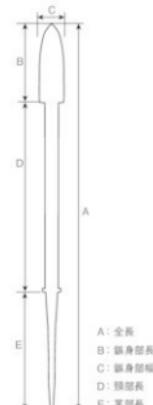
野田昭人 1990「長田古墳群（1、2、3号墳）」『山梨考古』第31号 山梨県考古学協会

山梨県考古学協会 1992「山梨考古」長田古墳群見学会特集号

御坂町・御坂町教育委員会 2004「長田古墳群」 御坂町教育委員会埋蔵文化財概要報告書 h16-2

宮澤公雄 1991「御坂町長田古墳群の調査」『帝京大学山梨文化財研究所報』第12号 帝京大学山梨文化財研究所

宮澤公雄 1998「長田古墳群」『山梨県史』資料編1 原始・古代1 山梨県



目 次

例 言

凡 例

第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第3節 調査方法	3
第4節 遺跡概要	3
第2章 遺跡の立地と環境	6
第1節 遺跡の地理的位置	6
第2節 遺跡の歴史的環境	6
第3章 遺構と遺物	10
第1節 墳 丘	10
第2節 石 室	10
第3節 遺物出土状況	11
第4節 出土遺物	12
第4章 総 括	20
第1節 長田1号墳の築造年代	20
第2節 出土遺物について	20
第3節 長田古墳群の位置づけ	22
参考文献	25
おわりに	26

表 目 次

第1表 出土遺物観察表（土器）	16	第3表 出土遺物観察表（金属製品）	17
第2表 出土遺物観察表（石製品）	16	第4表 出土遺物観察表（玉）	19

図版目次

第1図 長田古墳群全体図	5	第13図 石室掘り方	38
第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡	7	第14図 前庭部遺物出土状況（1）	39
第3図 石室地区割り図	8	第15図 前庭部遺物出土状況（2）	40
第4図 甲府盆地における後期古墳分布	23	第16図 主体部遺物出土状況	41・42
第5図 古墳全体図	27・28	第17図 石室内遺物出土状況（金属）	43・44
第6図 墳丘セクション図（1）	29	第18図 石室内遺物出土状況（土器・人骨）	
第7図 墳丘セクション図（2）	30		45・46
第8図 盛土除去平面図（1）	31	第19図 出土遺物（1）	47
第9図 盛土除去平面図（2）	32	第20図 出土遺物（2）	48
第10図 石室展開図	33・34	第21図 出土遺物（3）	49
第11図 石室断面図	35・36	第22図 出土遺物（4）	50
第12図 閉塞石	37	第23図 出土遺物（5）	51

第24図	出土遺物（6）	52	第27図	出土遺物（9）	55
第25図	出土遺物（7）	53	第28図	出土遺物（10）	56
第26図	出土遺物（8）	54			

写真図版目次

図版1	1. 長田古墳群航空写真(1)(第1次調査)	3. 前庭部遺物出土状況(2)
	2. 長田古墳群航空写真(2)(第1次調査)	4. 前庭部遺物出土状況(3)
図版2	1. 調査開始前(1)(第1次調査)	5. 前庭部遺物出土状況(4)
	2. 調査開始前(2)(第1次調査)	6. 前庭部遺物出土状況(5)
図版3	1. 除草後(東より)	7. 石室内遺物出土状況(1)
	2. 除草後(北より)	8. 石室内遺物出土状況(2)
	3. 除草後(西より)	図版9 1. 石室内遺物出土状況(3)
	4. 除草後(南より)	2. 石室内遺物出土状況(4)
	5. 古墳全景(1)	(第1次調査)
図版4	1. 古墳全景(2)	3. 石室内遺物出土状況(5)
	2. 墳丘頂部盛土状況	4. 石室内遺物出土状況(6)
	3. 墳丘頂部盛土断面	5. 石室内遺物出土状況(7)
	4. 墳丘東側盛土断面	6. 石室内遺物出土状況(8)
	5. 墳丘西側盛土断面	7. 石室内遺物出土状況(9)
図版5	1. 盛土除去後(1)	8. 石室内遺物出土状況(10)
	2. 盛土除去後(2)	(第1次調査)
図版6	1. 石室内部	図版10 1. 石室内遺物出土状況(11)
	2. 左側壁(1)	2. 石室内遺物出土状況(12)
	3. 左側壁(2)	3. 石室内遺物出土状況(13)
	4. 右側壁	4. 石室内遺物出土状況(14)
	5. 床面	5. 石室掘り方(1)
図版7	1. 封塞石	6. 石室掘り方(2)
	2. 封塞石内側	7. 調査風景
	3. 封塞石除去後	8. 石室内調査風景
	4. 奥壁裏込め断面	図版11 出土遺物(1)
	5. 右側壁裏込め断面	図版12 出土遺物(2)
	6. 左側壁裏込め断面	図版13 出土遺物(3)
	7. 奥壁裏側検出状況	図版14 出土遺物(4)
	8. 右側壁裏側検出状況	図版15 出土遺物(5)
図版8	1. 左側壁裏側検出状況	図版16 出土遺物(6)
	2. 前庭部遺物出土状況(1)	

第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

山梨県笛吹市御坂町下黒駒字北長田にある金川工業団地は、当時の東八代郡御坂町（現笛吹市御坂町）によって計画された。この計画を受け御坂町教育委員会では、工業団地建設に先立って試掘調査を実施した。試掘調査の結果、多くの古墳が存在することが明らかとなり、御坂町・御坂町金川工業団地内遺跡調査会によって平成元年（1989）11月1日より発掘調査が開始され、平成4年（1992）4月までの約2年6カ月にわたり調査が実施された。

古墳群中の長田1号墳は、工業団地入居者である株式会社エス・エル・ティ・ジャパンの依頼により、御坂町教育委員会が平成元年11月より発掘調査を実施した。この古墳については、調査開始前から現地保存が決定していたため、周溝の確認、石室図面の作成、石室内の一部を中心とした調査にとどめた。

平成23年（2011）4月、有限会社アール・エス・ビジネスによって駐車場建設が計画され、古墳が削平されることとなった。笛吹市教育委員会より公益財團法人山梨文化財研究所に対し発掘調査支援の依頼があり、原因者である有限会社アール・エス・ビジネス、笛吹市教育委員会、公益財團法人山梨文化財研究所の三者で協議を行った。その結果、「埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を結び、有限会社アール・エス・ビジネスと公益財團法人山梨文化財研究所の間で委託契約を締結し、発掘調査にあたることになった。

調査体制

第1次調査

調査主体 御坂町教育委員会

調査担当者 野田昭人（御坂町教育委員会）

調査員 小林健二（現山梨県埋蔵文化財センター）

発掘調査参加者 荒川奈津江、荒川公子、星野松子、長尾美子、角田寛子、大鷹よし子

整理作業参加者 皆川洋、池谷玲子

第2次調査

調査主体 笛吹市教育委員会

調査担当者 望月幸和（笛吹市教育委員会）

調査員 宮澤公雄（公益財團法人山梨文化財研究所）

発掘調査参加者 河西町男、筒井聰、中川美治、長沢春雄、平賀早苗

整理作業参加者 岩崎満佐子、齊藤ひろみ、須田泰美、竜沢みち子、田中真紀美、中川美治、平賀早苗、藤原五月

事務局 林紀子、柳本千恵子（公益財團法人山梨文化財研究所）

第2節 調査経過

笛吹市御坂町長田古墳群については、御坂町金川工業団地建設に先立って、平成元年11月1日より平成4年4月までの約2年6カ月にわたり、御坂町教育委員会・御坂町金川工業団地内遺跡調査会によって発掘調査が実施された。ここでは、長田1号墳の調査に限って調査経過に触れる。

第1次調査は、御坂町金川工業団地建設に先立って調査が実施された最初の古墳であり、御坂町教育委員会により平成元年11月1日より発掘調査を実施した。

第2次調査は、駐車場建設に伴って、平成23年5月6日～6月20日まで発掘調査を実施した。

整理作業は、第1次調査によって出土した遺物のうち、土器類の復元作業しか行われていなかったため、第2次調査終了後に報告書刊行に向けて2回にわたる調査によって出土したすべての資料について、公益財團法人山梨文化財研究所において実施した。

調査日誌

第2次調査（平成23年）

- 4月27日 基準点設置作業
5月6日 機材搬入、調査開始
5月9日 調査開始・人力による除草作業
5月10日 除草後古墳全景写真撮影、2号トレンチセクション図作成
5月12日 2～4号トレンチセクション図作成
5月18日 重機による表土剥ぎ開始、前庭部調査
5月23日 墳丘裾精査、石室内調査開始
5月25日 石室内調査、人骨、須恵器、鏡出土
5月26日 墳丘南、西側精査
5月27日 石室割り付け作業
5月30日 石室内調査、人骨、金環出土
6月2日 石室内調査、直刀、轡出土
6月7日 墳丘航空写真測量、石室写真測量
6月8日 墳丘断ち割り調査
6月9日 古墳盛土除去開始
6月10日 裏込め石写真測量
6月11日 閉塞石実測作業、天井石撤去作業
6月13日 側壁側裏込めエレベーション図作成、側壁撤去開始
6月16日 碠床断面図作成
6月17日 石室掘り方掘り下げ
6月20日 石室掘り方写真測量、機材撤収、発掘調査終了

第3節 調査方法

ここでは、調査経過について第2次調査を中心に触れる。第2次調査では、工事対象区域内には古墳のみが存在していることから、古墳および周溝が存在する可能性のある範囲を調査区として設定し、調査の対象とした。

第1次調査において、古墳調査の主軸を決定し、墳丘端の調査ならびに石室の図面作成を行っていることから、第2次調査においても、第1次調査時の基準点を復元して使用した。

古墳の墳丘ならびに周辺の除草作業を人力によって行い、現状写真撮影の後、主軸方向ならびに直交する方向にトレンチを設定し、セクション図の作成を行った。その後、重機による表土剥ぎを行い、周溝の確認作業、石室内の調査、図面作成を行うこととした。

石室内の調査が終了した段階で、重機により石室の解体を行い、図面の作成ならびに石室掘り方の調査、図面作成を実施した。

調査区全体を被うように国土座標にあわせて南北方向をX軸、東西方向をY軸とするグリッドを設定し、南西隅を基点とした、世界測地系平面直角座標第79系のX = -41330.000、Y = 16510.000（北緯35度37分38秒、東経138度40分56秒）を基点（X = 0、Y = 0）とした。

出土した遺物は、原位置が明らかなものは、第1次調査では平板測量を実施、第2次調査では写真測量によって微細図を作成し、光波測量機器を用いて個別に取り上げを行った。また、石室内は国家座標によって設定したグリッドとは別に、主軸ラインを基準として1mのメッシュで区割りを行い、区画毎に床面礫敷き下の土壤の回収、土壤洗浄を行い微細遺物の回収に努めた（第3図）。

遺構図の作製は、写真測量を基本としたが、セクション・断面図など一部図面は手作業による実測などで補完した。なお、石室展開図は、第1次調査時に作成されたものに、第2次調査において補完、修正した。

第4節 遺跡概要

長田古墳群は、金川左岸の自然堤防上に立地する。金川工業団地建設に先立って、平成元年11月1日より発掘調査を開始し、35基の古墳を調査した（第1図）。

発掘調査が実施される以前においては、古墳が点在する事実は知られていたものの、すべて無名墳として扱われていた。古墳の内容も知られることがなかったことから注目されることもなく、これほど大規模な古墳群であるとの認識もなかった。工業団地は数社が入居予定であったため、開発区域内をいくつかに分割して調査にあたった。そのため、1～22号墳とF-1～16号墳（うち5・14・15号欠番）と古墳番号が分かれるが、開発区域内に合計35基の古墳が確認され発掘調査を実施した。調査対象地域内においても、主体部まで完全に破壊され、石室用材と遺物のみが散乱する地点や現存しないがかつては古墳が存在したことが近世の古絵図によって明らかとなっている地点などもある。

本古墳群の扇状地上位には「篠塚」、「傾城塚」、「髪振塚」等の字名が残っており、上流域にも古墳群が分布している可能性が高い。

大正3年に刊行された『東八代郡誌』には、本古墳群周辺の古墳についての記載がある。「無名墳 同村下黒駒北長田にあり。塚の周間十五六間。石室は入口四尺高さ四尺、九尺許進みて奥に入る。縱一丈二尺横九尺五寸余なり。北長田には他にも石室四ヶ所ありしが、今は皆開拓せられたり。」とある。ここに記載された古墳が、発掘調査された古墳かどうかは不明である。ただし、横九尺五寸という幅の広い古墳は古墳群中に知られず、誤認の可能性もある。

その他にも、筋見塚（黒駒村下黒駒西新井）、屋戸林（同村下黒駒）、傾城塚（同村下黒駒字傾城塚）、現経塚（同村下黒駒字南長田）、髪振塚（同村下黒駒字髪振）、天神塚（同村下黒駒字天神塚）などがあり、鉄刀や金環などが出土したことが記載されるなど、多くの古墳が存在したことが知られる。

調査された古墳のほとんどは、耕作によって墳丘および主体部の上半が破壊され、著しく形状の変更を受けているものであった。墳丘は四方から削平を受け、裏込石や崩壊した石室用材とともに耕作によって掘り出された礫を主体部付近に集積し、崩落防止のため下部を石垣で積み上げ、さらながら石塚のような状態で発見された。

古墳の多くは畑の境界とされ、石垣や石捨て場としてそのまま利用されるものが多く見受けられた。墳形も著しく変更を受け、明確にできないものがほとんどであったが、墳端の調査によって円形に周溝を巡らす例が多く、ほとんどが円墳であったと推定される。墳丘径は最大のもので25mほどを測り、小規模墳は周溝なども発見されなかつたが、主体部が近接して並列するような例（F-8・9号墳）がみられ、これから想定される墳丘規模は数メートルしかなかつたことが考えられ、墳丘規模に大きな格差が認められた。

発掘調査によって検出された埋葬施設はすべて横穴式石室であったが、墳丘同様に破壊を受けているものが多く、天井石が一部にでも残存する例は3基にしかすぎなかつた。

主体部は、金川流域に多くみられる花崗岩の自然石を用材として乱石積みしており、石材を加工するなどした割石を使用する例はまったくみられなかつた。主体部石材を積み上げながら、裏側にはかなり厚く裏込め石を積んでいた。主体部はすべて主軸を南北方向にとり、東ないし南西に開口する横穴式石室であった。石室形態は基本的に有袖式と無袖式の二つに大別されるが、玄門などの在り方から詳細な部分ではバラエ

ティーに富んでいた。石室も本墳のように8mを越える大形のものから2m以下の小形のものまで存在した。小形の石室埴は、残存状況が悪く上部構造を明らかにすることはできないが、石室高はそれほど高いものではあったとは考えられず、横穴式石室として機能していたことを想定することは出来ない。横穴式石室埴の退化形式である堅穴系の石室であると考える方が良いかも知れない。

無袖式石室には石室プランが狭長になると主軸長が比較的短く規矩形のプランを呈するものがみられる。有袖式石室は玄室が規矩形となり、石材も大形のものを用いる傾向があり、玄室のプランは概して胴張りを呈する。閉塞石は、多くが下段においては主軸に対し直交するように大形の礎を用いて積み上げ、中には石室の入り口幅とほぼ等しいような大形の用材を用いたものも認められた。一方、閉塞の上部では小形の礎を主軸に平行するように積み上げていた。石室内側の閉塞石は端正な面を形成させ、側壁の一部のような景観を与えていた。前庭部は入口部から「八の字」状に開き、敷石を持つ例が数基確認されているが、開口部付近が畠境となっており、耕作によって段状に改編されてしまい削平を受けている例が多く見受けられた。よって、どれほどの古墳がこのような前庭部を形成していたのかについては不明である。

調査されたほとんどの古墳が破壊および盗掘にあっており、副葬品の全容を知ることはできないが、遺物としては人骨、土師器、須恵器のほか、管玉・小玉・金環・銅鏡などの装身具、直刀、鉄鎌、刀子、馬具（轡・鉢具・飾金具）等が出土している。土器類は石室内に副葬される例はほとんどなく、供獻用として入口付近に置かれた例が多いものと思われ、とくに前庭部左側に破碎されたような状況で発見される例が多く見受けられたことから、儀礼において一定の規則があったことが想定された。

古墳にバラエティーがあることは先に触れたが、その中で特異な石室形態をもつものが存在する。

F-1号墳は、地山を深く掘り込む長方形の掘り方をもち、主体部のほとんどは掘り方内に収まり、側壁の一部と天井石が田地表面に露出するような形態をとる。また、閉塞石最下段の用材は、石室幅に近い大形の礎を横口に据えており、石室床面が墓前域より段差をもって一段下がる構造を呈していた。

20号墳は、両袖式石室に直交する玄室をもついわゆるT字形横穴式石室埴であり、この形態も甲府盆地では唯一の例となる。前庭部から7世紀後半段階の遺物が出土しているが、石室内から遺物の出土がなく、前庭部出土の遺物が古墳の築造時期を示しているのかは明らかにできない。



第1図 長田古墳群全体図(墳丘径は推定含む)

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 遺跡の地理的位置

山梨県笛吹市は、甲府盆地東部に位置する。

平成16年10月に東八代郡石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村、東山梨郡春日居町が合併して笛吹市として発足。平成18年8月には東八代郡芦川村を編入して現在に至っている。秩父山地鶴冠山西麓に発する東沢と国師ヶ岳南東麓に発する西沢を源流に持つ笛吹川が市域の北側を北東から南西へ流れしており、市名の由来ともなっている。市域の多くは、駿ヶ岳、黒岳をはじめとして、1,500m級の山々からなる御坂山地の山裾および山地から流れ出たいくつかの河川によって形成された扇状地上に立地する。

笛吹市御坂町は、北側から東にかけて金川を境界として同一宮町と、西は笛吹川を挟んで同石和町と南は天川を挟んで同八代町と接している。

御坂山地の八町付近を源流とする金川は、御坂町藤野木、上黒駒を通り、道場・若宮付近を扇状地扇頂部として、甲府盆地に18kmにもおよぶ広大な金川扇状地を形成している。市域の主要部はこの扇状地上に立地しており、この扇状地の多くはかつては桑園として、現在は果樹園として利用されており、峠東地域の果樹地帯としてモモ・ブドウの大生産地となっている。

長田1号墳の属する長田古墳群の立地する御坂町下黒駒は、金川左岸の扇状地扇頂部から扇央部にある。北西緩傾斜の金川扇状地扇央部に位置し、標高395mから407m付近の東西250m、南北350mの範囲に分布しており、周辺は果樹園および花卉園として利用されていた。

第2節 遺跡の歴史的環境

市域には多くの遺跡の存在が知られ、甲府盆地においてもっとも遺跡の分布が濃密な地域であるといつても過言ではない。

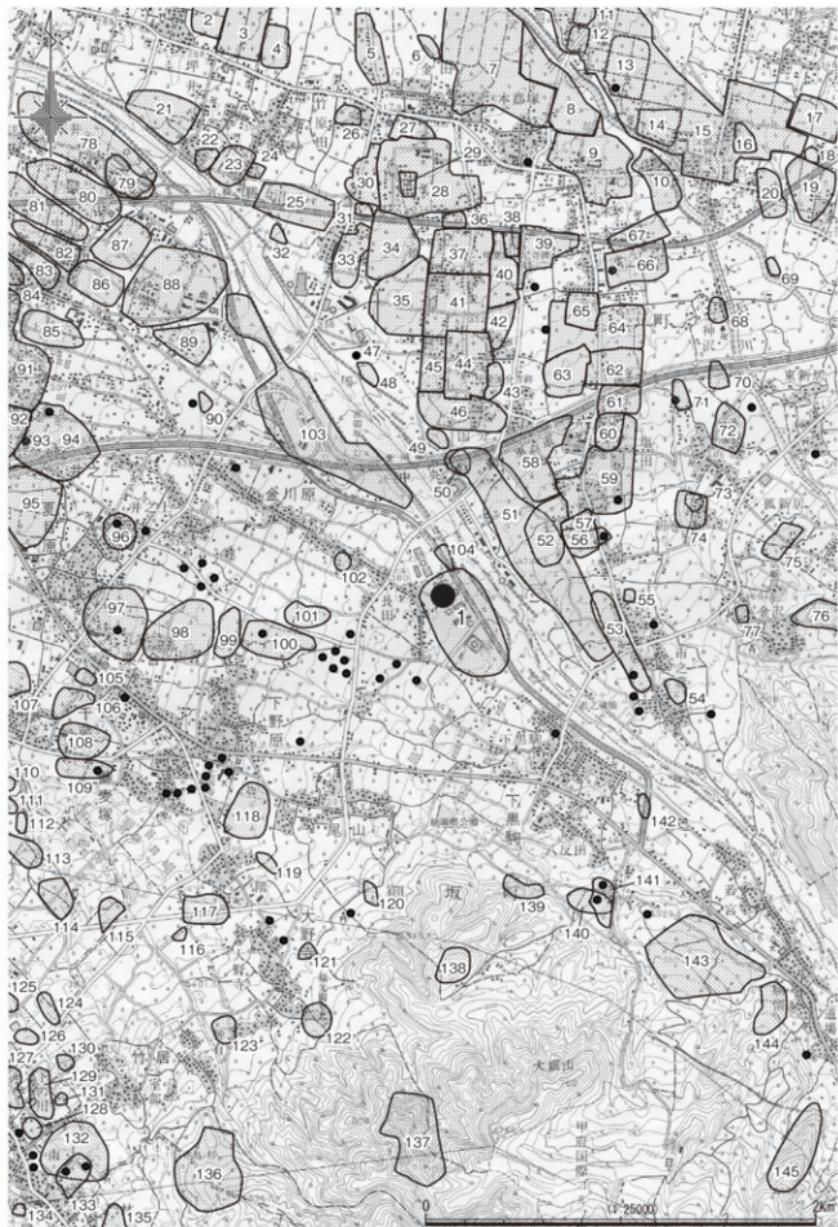
縄文時代の遺跡の多くは丘陵上に占地しており、前期の大規模集落である花鳥山遺跡や中期の三つ指土偶を出土した中丸遺跡、桂野遺跡など著名な遺跡が数多く分布している。

弥生時代以降、扇状地上に拠点を移すことになり、多くの遺跡が扇状地上に展開している。

長田古墳群の立地する金川扇状地扇央部から扇端部にかけては、古墳時代の集落遺跡ならびに後期古墳が数多く群集している地域である。長田古墳群のはかに金川左岸の扇端部には笛吹市四ツ塚古墳群、西には同錦生古墳群、金川右岸には同国分築地古墳群や楽音寺古墳群等がみられ、甲府盆地内においてもっとも後期古墳が集中して築造される地域でもある。

四ツ塚古墳群（第2図103）は、昭和56年に中央自動車道開設に先立って22基が、平成7年に「山梨県森林公園金川の森」建設に先立って5基の後期古墳が発掘調査されている。直径15mから16mほどの円墳が多く、川原石乱石積みの横穴式石室が主体を占める。副葬品には、土師器・須恵器のはか、勾玉・管玉・切子玉、円頭把頭、八窓鏡、鉄鎌、鎌、刀子などが知られる。6世紀末頃から7世紀後半まで造墓を行っていたものと思われる。

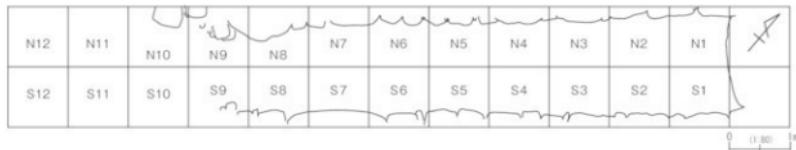
金川扇状地扇端に位置する錦生古墳群は、大小の古墳からなるが、その中核を成すのは全長17.54mの大形横穴式石室を主体部にもつ姥塚古墳である（同93）。姥塚古墳は、直径40mほどを測り、南西に開口する右片袖の横穴式石室墳である。古くから開口していたようで、出土遺物は明らかではないが、石室形態から6世紀後半の築造と考えられている。姥塚古墳に隣接する姥塚遺跡においても、4基の古墳が調査されている（同94）。そのうちの2基は横穴式石室が残存しており後期古墳であるが、石室の痕跡を残さない1基からは、古式の須恵器高杯が出土しており、5世紀代に遡る低墳丘古墳であると考えられる。同井之上地内からは陶棺が出土している。陶棺は幅1間、長さ2間ほどの礫床の石室から出土しているらしい。山梨県内に



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡

遺跡名一覧

1 長田古墳群	30 筑前原型跡	59 笠本地藏遺跡	88 孤原遺跡	117 向田遺跡
2 北越巻遺跡	31 鶴堂遺跡	60 塩田屋敷	89 茶かん遺跡	118 田代遺跡
3 坪井条里遺跡	32 西田町南遺跡	61 北堀遺跡	90 葉舞場遺跡	119 北原遺跡
4 後田遺跡	33 北大内遺跡	62 中新居遺跡	91 半行寺遺跡	120 向原遺跡
5 金田遺跡	34 梶畠遺跡	63 北中原遺跡	92 天神前遺跡	121 原遺跡
6 上深田遺跡	35 矢倉遺跡	64 石動遺跡	93 雄塚古墳	122 上坊地遺跡
7 本郡塚条里遺跡	36 甲斐国分尼寺跡北遺跡	65 雨宮氏屋敷	94 横畠(總保)遺跡	123 三ツ沢遺跡
8 清水遺跡	37 甲斐国分尼寺跡	66 葦師堂遺跡	95 錐柄田遺跡	124 一町田遺跡
9 輪掛遺跡	38 八ノ木神社遺跡	67 慈眼寺北遺跡	96 宮の前遺跡	125 法花田遺跡
10 車居遺跡	39 車地遺跡	68 神沢遺跡	97 橋詰遺跡	126 八反田B遺跡
11 亀沢遺跡	40 電ノ木遺跡	69 柳田遺跡	98 御界遺跡	127 前田遺跡
12 河原遺跡	41 松原遺跡	70 東新居遺跡	99 カニ田遺跡	128 植木遺跡
13 伊勢田遺跡	42 金山遺跡	71 天神堂遺跡	100 北川遺跡	129 後藤遺跡
14 今宮遺跡	43 北前田遺跡	72 古屋氏屋敷	101 年新田遺跡	130 梅ノ木田遺跡
15 小尾条里遺跡	44 甲斐国分寺跡	73 新巻本村遺跡	102 達富士浅間神社(古墳)	131 青木田遺跡
16 桜坪遺跡	45 甲斐国分寺西遺跡	74 新巻星敷	103 四ノ坂古墳群	132 三光遺跡
17 早川氏屋敷	46 甲斐国分寺南遺跡	75 南割遺跡	104 畦久保遺跡	133 竹居・御崎遺跡
18 西田北遺跡	47 経塚古墳	76 天狗平遺跡	105 桃ノ木遺跡	134 深沢道上遺跡
19 西田遺跡	48 西林遺跡	77 王山下遺跡	106 赤根田遺跡	135 土原遺跡
20 田村遺跡	49 豆塚北遺跡	78 宮の上遺跡	107 宮ノ後遺跡	136 花島山遺跡
21 南西田遺跡	50 豆塚遺跡	79 大原遺跡	108 道中根遺跡	137 小物成山
22 西前田遺跡	51 国分塙地古墳群	80 坪井遺跡	109 下原遺跡	138 大野屋敷
23 東前田遺跡	52 本地塙遺跡	81 赤井遺跡	110 丸山遺跡	139 八反田遺跡
24 満願寺遺跡	53 三瀬農道跡	82 中川松本遺跡	111 東小山A遺跡	140 能原山遺跡
25 西田町遺跡	54 横田遺跡	83 中新井遺跡	112 東小山B遺跡	141 屋戸林遺跡
26 夕雨田遺跡	55 宝福寺跡	84 一丁田遺跡	113 東小山C遺跡	142 横畠B遺跡
27 筑前原北遺跡	56 楽音寺遺跡	85 不動河原遺跡	114 中丸遺跡	143 桂谷遺跡
28 橋立遺跡	57 楽音寺古墳群	86 宮の前遺跡	115 宮ノ後遺跡	144 駒留小丸遺跡
29 筑前原遺跡	58 天神原遺跡	87 御幸道遺跡	116 宮下・龍光寺遺跡	145 黒馬氏屋敷



第3図 石室地区割り図

においては唯一の例となるが、胎土や脚の装着方法から在地のものとされ、その大きさからは火葬骨や小児の埋葬施設と考えられている（小野 1999）。

長田古墳群の対岸である金川右岸の国分塙地古墳群は、110基ほどの古墳が知られる大規模な群集墳である（同 51）。分布にいくつかのまとまりがみられ、下流域から国分塙地・国分南森・塩田本地蔵・塩田大新田の支群に分けることができる。調査例はわずかであるが、主体部は、自然石の乱石積みで、ほとんどが横穴式石室を有し、無袖式と両袖式のプランが知られる。

国分塙地古墳群に隣接する楽音寺古墳群は、塩田古墳群とも呼ばれ、稲荷塙古墳、狐塙古墳、蝙蝠塙古墳、八幡塙古墳が知られる（同 57）。そのうち、稲荷塙古墳は、全長 8 m の横穴式石室を有する径 20 m ほどの円墳である。副葬品の内容は不明であるが、墳丘には埴輪を樹立する。埴輪は形象埴輪と器財埴輪が知られ、人物埴輪、輦などがある。山梨県内では数少ない埴輪を樹立する後期古墳のうちの 1 基である。

経塚古墳は、金川右岸に位置する。金川の森公園建設に先立って復元整備を目的として発掘調査が実施された（同 47）。主体部は自然石乱石積みの両袖式横穴式石室で胴張りの玄室長 3.0 m、羨道部長 3.6 m の小

形墳である。出土遺物は鉄斧が知られるのみであるが、石室プランなどから7世紀前半に築造されたものだと考えられている。墳形は八角形墳とされるが、問題も多い。

この扇状地上には、古墳時代から奈良・平安時代の遺跡も多く分布しており、甲府盆地において最も遺跡が濃密に分布する地域である。

姥塚古墳に隣接する二之宮・姥塚遺跡（同94）は、中央自動車道の建設に先立って発掘調査が実施され、縄文時代から平安時代の堅穴住居530軒余りが発見された。古墳時代において最も早くカマド、須恵器などが導入された集落遺跡であり、山梨県内においても当該期の最大規模の拠点的集落遺跡といえる。

金川扇状地扇端部には大原遺跡がある（同79）。古墳時代中期から平安時代末頃にかけての堅穴住居358軒が発見された。盛土保存された地区や調査対象地外などを含めると、遺跡の規模はさらに大きなものである。TK208形式期頃から集落の形成をはじめ、平安時代まで連綿と営まれている。集落内からは「□梨（郡）玉井郷長」と書かれた墨書き土器が出土し、「和名類聚抄」にみえる「玉井郷」に属する集落であったことが判明した。また、集落の一角からは古墳時代中期の祭祀遺構も発見されている。長径2.5m、短径1.7mの浅い皿状の土坑から土師器塊・高坏・埴・壺などとともに手捏土器が100個体余り、石製模造品（劍4・臼玉49）、少量の炭化米が出土している。手捏土器は、器形・整形技法に多様性がみられるが、器形・胎土とともに酷似したものが2個一組として抽出できることから、意図的に2個を一組として製作され、なんらかの祭祀行為が行われたことが想定される。

本墳の3kmほど北西には国衙の地名が残り、甲斐国府の存在が推定されている。また、金川右岸の笛吹市一宮町地内には国分寺・国分尼寺などもあり、古墳時代後期以降、本地域が政治・文化の中心地であったことが理解される。これには、東海道から籠坂峠を越え、御坂峠から甲府盆地へ通じた後の「御坂路」が果たした役割が大きかったものと考えられる。

第3章 遺構と遺物

第1節 墳丘

本墳は、西に緩やかに傾斜する金川扇状地上に立地し、調査を開始する以前においては古墳周辺は果樹園となっていた。古墳は調査を開始する直前まで、天井石が撤去された石室入口部に小屋が架けられ、農業用の倉庫として使用されていた。

墳丘は、大きく削平を受けおり、主体部を中心にわずかに墳丘を残すのみであった。削平された墳丘は、石室用材や裏込め石などの崩壊防止のために主体部を囲むように石垣が巡らされ、耕地の確保を図っていた。

前庭部前面にあたる墳丘南西側は、畑の境界となり東西方向に石垣が積まれ南側が0.65 mほど低く、奥壁側にあたる北東側においても墳丘部はやや弧状になるが、東西方向に石垣が積まれ、北側は0.55 mほど低くなっていた。東側は主体部を取巻くように弧状の石垣となっていたが、墳丘を削平した土砂を平坦にしたもので、墳丘の盛土はほとんど残存していなかった。西側にも石垣が積まれていたが、弧状とはならず主体部主軸に並行するように直線的に積まれ、西側が一段低くなる。比高差は1 mほどである。

以上のように、墳丘盛土はほとんど残存しておらず、東側では裏込め石層の上に0.8 mほどの幅をもって残存していたに過ぎない。奥壁側の墳丘構築土も1 m足らずの幅で残存していたに過ぎないが、黒褐色砂質土を主体として互層状態を保っていた。西側においても同様な状況にあり、裏込め石上に互層がみられた。古墳の盛土は旧表土上に施されたもので、東西の墳丘セクションにみられる第20層がそれにあたる(第6図)。

墳丘頂部には、わずかではあるが土の堆積があり、墳丘構築土が残存しているものと思われたことから、セクションベルトを残し土層観察を行ったところ、天井石上面にビニール製の肥料袋や農業用シートなどが敷かれており、その上に10cmほどの厚さで土が盛られていた。農業用資材庫として使用されていたことから、おそらく石室内への雨漏り対策として敷かれたものであろう。よって、資材倉庫として使用する以前においては、墳丘頂部には墳丘構築土は残存せず、天井石が露出していたものと考えられる。

墳丘西側は、第1次調査時においては、果樹園として平坦面が広がり残存していたが、第2次調査時には工場建設によって削平を受けており、調査することは出来なかった。

第1次調査において、主体部主軸および直交する四方向にトレチを設定し、周溝の確認作業を実施したが、周溝は確認できなかった。第2次調査においても、第1次調査の主軸ラインを踏襲し、再度トレチ調査を実施したが周溝は確認できず、その後の表土を全面的に掘削した調査においても周溝を確認することは出来なかった。現状では、石室主軸方向で132 m、直交軸方向で8.5 mほど、高さ1.8 mほどを測るが、本来の墳丘規模は不明である。

本墳の石室規模を周辺の古墳と対比すると、直径25m前後の規模であった可能性が高いものと考えられる。

第2節 石室

主体部は、南西に開口する無袖式の横穴式石室であるが、左側壁の奥壁から7 mのところで一石ではあるが礫を縦方向に用いて積んでおり、それより入口側は石室中央から奥壁側とは異なり、側壁用材にやや小形の円礫を多用している。また、閉塞部付近では、両側壁基底部ともに若干内側に入り込み、石室幅が狭まることから渓道を意識した構造であったといえる。主軸をN - 50° - Eに採り、石室全長8.6 m、幅は奥壁付近で1.56 m、中央部で1.4 m、閉塞部付近で1.4 mを測り、両側壁とも閉塞部までは直線的で入り口に向かい若干幅が狭くなる狭長なプランを呈する。

閉塞石は、奥壁から7.2 mのところに位置し、基底部で奥行約2 mを有する。幅0.4 ~ 0.5 mほどの扁平な礫を石室主軸と直交方向に用いて積んでいる。現状で4段まで残存し、高さ0.76 mであった。石室側は扁平な礫を横口に配し、石室壁面同様に端正に積み上げているが、入口側では小形の石塊を乱雑に積み上げ

ているだけであった。右側壁側の最上部の礫は側壁上に重なっていることから、後世の積み直しの可能性が高いが、現状の閉塞石上部と同一レベルにあり一体化していたため、撤去せずに図化した。

床面には拳大から30cmほどの礫を隙間なく、やや大形の石材は床面が平坦になるよう、平坦面を上にして敷いていたが、拳大の礫は乱雜に敷かれていた。大形の石材、拳大の石材とも散在的であり、石室内の位置によって石材の大きさに違いはみられなかった。また、複数次の床面を示すような状況もみられなかった。石室中ほどから奥壁にかけての右側壁側には礫がみられないところがあったが、後世の攪乱によるものであり、堆積土中には煙草の吸殻等がみられた。

天井石は、奥壁から6石目分が残存しているが石室のはば中央までであり、取り去られた天井もほぼ同等な個数が架構されていたものと思われる。最も奥壁寄りの天井石は、長さ1mほどの細長い礫を主軸と並行して2石並列し、奥壁から2石目の天井石と奥壁に架構しており、天井は30°前後の傾斜をもつ。奥壁から2石目から6石目までの天井石は、長さ15~18mほどの細長い自然石が横架されていた。石室高は、奥壁部で1.6m、石室中央で2.0mほど、奥壁部から中央へ向かって徐々にその高さを増していた。

側壁のうち右側壁は、入口部から中央付近まで基底石から2~3石を残し大きく破壊を受け、左側壁も入口部の石積みが取り去られていた。破壊を受けた側壁の一部は石室内に崩落していた。入口部は両側壁とも上半が破壊されていることもあるが、残存する基底部には大形の石材を用いることはなく積んでおり、明確な入口部の石積みを確認することはできなかった。側壁用材は、0.5~0.8mほどの比較的扁平な自然石を用いた7~8段の横口積みを基本とするが、閉塞部から入口にかけての差道を意識したと思われる部分では、小形の円礫をやや乱雜に積んでいた。閉塞部付近では右側壁が閉塞部石室内側、左側壁が閉塞部にいずれも1石のみではあるが、基底部に1.2~1.7mもある大形の石材を据えていた。側壁はやや持ち送り気味に積まれており、その角度は81°から85°ほどとなる。

奥壁は、最下段に幅1.43m、高さ1mほどの上辺が平坦な礫を立てている。2段目より上段は、側壁よりやや小ぶりな扁平な礫を4段ほど横口積みしている。持ち送りの角度は、77°と側壁より持ち送りが顕著であった。

前庭部は、石室入口より八字状に聞くものと思われるが、右側石列は削平されており確認することは出来なかった。西側石列は4石ほど確認できるが、これより南西側は畠境として石垣が積まれており、列石が終息しているのか、削平を受けているのか判断できなかった。底面には拳大の礫が多数確認されたが、敷いたような状況は確認できなかった。

主体部調査が終了した後、床面の礫および石室用材を除去し、石室掘り方の調査を行った。石室入口部側は畠の造成によって削平を受けており現存しないが、現状で主軸長12mほど、幅4mほどの隅丸長方形の掘り方が確認された。掘り込みの深さは0.5mほどであった。ただし、石室の基底部に大形の石材を用いた所では、その部分のみ大きく掘り込みを行い、隣接する石材との高さ調整を図っていた。

第3節 遺物出土状況

調査によって発見された遺物は、前庭部付近と石室内に大きく分布が分かれる。ただし、同一個体が両地点から出土する例もある。

前庭部および入口部墳丘上からは、土師器、須恵器が出土している。土師器には壺、壺があり、須恵器には壺蓋、壺身、甕、壺、甕などがある。前庭部右袖側は削平されており残存状況が悪いため明確にはできないが、遺物は左袖側前庭部に集中する傾向にある。これは、本古墳群中の他の古墳にもみられる傾向である。前庭部前面は畠境となっており、削平を受け石垣が積まれていたが、石垣中から多くの土器が出土した。

石室内からは、ほぼ全面にわたって多くの遺物が出土しているが、奥壁付近においては遺物分布が希薄である。これは、奥壁付近の床面が近年の攪乱を受けていたことによる影響かもしれない。出土遺物には、土師器、須恵器、武器（鉄刀・鉄鎌）、馬具（轡・鎧・飾金具）、装身具（金環・ガラス小玉・丸玉）などがある。

人骨は、石室中央付近に散乱しており、埋葬時の状態を保ってはいなかった。頭骨は、石室中央付近のS-5区にあり、肢骨はそれより奥壁寄りの右側壁付近のN-4、S-3・4区に集中することから、埋葬時の状況を保っていたとすれば頭部を開口部に向かって埋葬された可能性もあるが、後世の搅乱の影響やこれら検出された人骨が同一の人骨であるかどうかの検証はしておらず、断定は出来ない。

土師器は少なく、石室入口部付近で高环脚部、坏が出土しているが、いずれも小破片であった。

須恵器も同じく、石室入り口部付近に集中して分布する傾向にあった。閉塞石に近いS-7区では無蓋高坏、提瓶が、S-6区では有蓋脚付長颈壺の蓋などが出土している。有蓋脚付長颈壺および甕は、石室中ほどから入口部および前庭部からも出土しており、接合関係がある。後世に石室内から破片が持ち出されたことも考えられるが、両者とも前庭部においても一定のまとまりをもっていたことから、供獻ないし副葬される段階において破碎し、前庭部と石室内に分け置かれた可能性もある。

その他、石室内からは、縁釉陶器、土器なども出土している。

金属製品のうち、鉄刀および付属金属製品は石室中央よりやや奥側の左側、N-4区にまとまって出土した。鉄刀は鏽による劣化によって旧状を留めておらず、いずれも小破片となって発見されたが、石室主軸と並行して置かれていたようである。鐵鎌は、N-S-4~7区に散在しており、集中した出土は示していないかったが、S-5・6区に一定のまとまりを認めることはできる。

馬具類は石室中央から入口側において出土している。閉塞石付近のN-S-7区において、鏡が一組出土した。轡は少なくとも2個体出土しており、2個体とも石室中央部右側壁付近のS-4・5区より出土しており、付近からは鉢具も出土している。飾り金具は数点であるが、轡より石室入口側のS-6区に位置していた。

装身具のうち金環は4点出土しているが、1点は前庭部付近の石垣中から出土しており、石室内より持ち出されたものであろう。残りの3点は、石室中央よりやや入口側に2点、やや奥壁側より1点が出土している。土製丸玉は、石室内の閉塞部付近に集中しており、閉塞石下からも出土している。ガラス小玉は、奥壁に近いS-2区を中心とする地点と土製丸玉同様に閉塞部を中心とした地点にまとまりがみられる。

その他、環状青銅製品が、閉塞石より15mほど中央寄りの有蓋脚付長颈壺の蓋に近接し、寛永通寶は石室中央からやや奥壁に近いN-2区から出土した。

第4節 出土遺物

出土遺物には、土師器、須恵器のほか、金属製品として、鉄刀・刀装具・鐵鎌などの武器、環状金銅製品、刀子、轡・鏡・飾り金具・鉢具などの馬具、装身具として金環・土製丸玉・ガラス小玉などが出土している。

a 土器

土師器（第19図1~16）

第19図1~8は古墳時代後期の土師器坏である。同1~7は須恵器坏蓋模倣坏で外面に稜を有する。口唇部が外反しつつ端部が内脣するもの（同1~3）と口唇部が外反あるいは外傾するもの（同4~5）がある。これらの土器はいずれも丸底で、同1~3が内外面とも黒彩、4~7は内外面とも赤彩されている。同8は扁平な広い底部から口縁部へ丸みをもって立ち上がる器高の低い坏で、内外面とも黒彩されている。

同9~13は、奈良・平安時代の土師器坏（同9~12）、皿（同13）である。

同14は土師器壺で球形の胴部から頭部は直線的に立ち上がり、口唇部は外反する。外面の全面と内面の頭部下まで赤彩されている。

同15は赤彩された高坏の脚部である。

同16は近世以降の土師質の鍋である。

須恵器（第19図17~第21図4）

第19図17~第21図4は、須恵器である。第19図17~19は坏蓋で、17・18はつまみをもたないもので、同

19はわずかではあるがかえりが確認できるが、つまみをもつかどうかは不明である。同17・18のロクロ回転は右回転である。

同20~23は坏身である。立ち上がりはいずれもそれほど高いものではない。同20のロクロ回転は右回転である。

同24は無蓋長脚二段透高坏である。脚中ほどに二重の沈線を巡らせ、2段としている。上下段とも三方に透しをもち、上段の透しはスリット状で幅1mmほどである。坏部外面には二段の稜をもつ。焼成は良好で非常に硬質である。

第20図1・2は甕である。同1は口縁部から頸部にかけての破片であるが、口縁部、頸部に沈線文を巡らせ区画内に櫛歯状工具による斜状沈線文、斜状刺突文を施している。ただし、頸部に巡る沈線文は斜状沈線文施工後に施している。同2は肩部の破片で、肩部に一重の沈線を巡らせ、その下に櫛描沈線文を施している。

同3は有蓋脚付長頸壺の蓋と思われる。やや厚手に作られており、つまみを有する。ロクロ回転は右回転である。

同4は有蓋脚付長頸壺である。脚部には三方透をもつ。壺肩部には一重の沈線を巡らせている。焼成は良好で非常に硬質であり、無蓋長脚二段透高坏の胎土・焼成と類似する。同3の蓋とは胎土・焼成に違いが認められるが、大きさや出土状況からセット関係にあるものと判断した。

同5は壺の口縁部資料である。口唇部は肥厚し、玉縁状となる。内面には青海波文を明瞭に残す。同6~第21図1・2は同一個体の体部破片であり、肩部外面にはカキメ痕、内面には明瞭な青海波文を残す。

第21図3は提瓶である。口頸部は短く、強く外反する。肩部には環状把手の痕跡があるが、いずれも欠損している。底面に打ち欠きの痕跡を残す。

同4は平底の壺の破片資料である。

繩文土器（第21図5~7）

第21図5~7はすべて地紋に繩文をもつ、繩文土器深鉢の破片資料である。同5は五領ヶ台式土器、同6は前期、同7は中期中葉のものであろう。本遺跡周辺に繩文時代の集落は知られていないが、集落が存在する可能性は高い。

縄釉陶器（第21図8）

第21図8は平安時代の縄釉陶器である。口縁部を欠損し、被熱している

b 金属器

武器

直刀（第22図1~9）

第22図1から9は直刀ならびに刀装具である。同1・2は円頭把頭である。残存状態が悪く剥離が激しいため、破片資料となっており、全体の形状は不明である。2点は、接合関係にはないが同一個体である。同1に径3mmほどの目釘穴が1孔穿たれている。

同3から7は直刀である。残存状態が悪く、鍔による膨張や剥離などによって、刃部の形態なども判然としない。それぞれは接合関係にないものの出土状態などからみて同一個体であると思われる。同3は鉈部でややふくらみをもつふくら鉈である。同7は茎で鍔、鍔、目釘が付着する。関は不均等な両関で、刃側が深く切れ込み、茎尻にかけて徐々に幅が狭くなる。茎尻は斜角に切られる形態を呈する。関から4.3cmのところに目釘孔は一ヵ所に設けられ、径0.5cm、長さ1.4cmほどの目釘が残存する。鍔は無窓の鍔で、長径6.8cm、短径5.9cm、内孔の長径2.5cm、短径1.9cmの卵倒形を呈する。同8・9は資金具の一部であろうと思われる。

環状金銅製品（第22図10）

同10は鋳造環状金銅製品である。銅の地金に全面鍍金しており残存状態は良好である。外径4.5cm、内径4cm、高さ0.8cmを測る。断面形態は、内面は直線的であり、蒲鉾状を呈する。内面の直交する2点に三角形状の鑿痕が確認できるが性格は不明。鍔とするにはやや小形であり、鉄鉢の部品かとも思われるが、やや径

が大きすぎ、現状では用途不明の金銅製品である。これまでの報告において、鉄とされてきたものである。

鉄鎌（第23～25図22）

第23図～第25図22までは鉄鎌であり、鎌身のみで50点ほどを数える。すべて尖根系の鎌で平根系の鉄鎌はみられない。鎌身における刃部の形態によって両刃式と片刃式に分けることが出来る。

両刃式には柳葉式（第23～24図6・14～19・第25図1～5）、撫閥三角型式（第24図7～11）、鑿箭式（第24図12）がみられる。側線がやや内行ないし平行する柳葉式には鎌身断面が片丸造（第23・24図1・14～17）、両丸造（第24図2～5・18・19・第25図1・2）、平造（第24図6・第25図3～5）になるものがみられる。鎌身が鑿箭の形態を呈し闇をもつものと側面がS字状を呈する本墳出土例については同一系譜上にあるものと考えられ、区別が判然としない個体もあるため、本報告では柳葉式として一括した。なお、鎌身と頭部の境が明瞭でないものについては鑿箭式とした。

柳葉式の茎関部は棘状に突起するもの（第23図1～17・第24図2～6）、台形に隆起するもの（第23図18・19）、闇をもたないもの（第24図1）がある。

撫閥三角型式は、鎌身先端が三角形を呈し、鎌身闇は明確な段を有しないものを一括した。ただし、柳葉式と類似し明瞭に区分できないものも存在するが、鎌身長が短く鎌身街闇が明瞭でないものをこちらに区分した。鎌身断面は片丸造（第24図7～9）、両丸造（同10・11・第25図6）がある。茎関部は棘闇となるもの（同7～10）、三方が台形に隆起し二方に棘闇がつくもの（同11）がある。

第24図12は、鎌身先端が三角形状を呈し、鎌身闇をもたないもので、鑿箭式とした。鎌身断面は片丸造で茎闇は棘闇である。

第24図13・第25図7は片刃箭式で、前者は片丸造、無茎闇、後者は片丸造である。

工具

刀子（第25図23～26）

第25図24は先端部を欠くが、刀子の切先だと思われる。同23・25は、刃部および茎部でいずれも両闇である。同26は、茎部のみの破片資料である。

馬具

轡（第26図～第28図9）

第26図1～6は轡であり、2個体以上が確認された。同1は素環鏡板付轡である。街を連結させる環状部および遊環の一部を欠損するのみではば完形。街は二連式であり、径3.5～4cmの円形の遊環を介して素環鏡板と引手と連結している。街の連結部および街先環は円形である。引手は引手軸から約45°屈曲して円形の引手壺に繋がっている。鏡板の環状部分は、7.3×64cmの楕円形を呈し、幅34cm、高さ31cmの背の高い方形立聞を開け付ける。立聞孔は、幅1.6cm、高さ0.9cmの楕円形を呈する。街の一連の長さは8.5cm、引手軸は長さ12.3cmである。

同2は轡の一部で、二連式の街と素環鏡板が残存する。街先環がいずれも一部を欠損するが、街先環の残存部と鏡板が付着していることから、街先環と鏡板が連なる形式で、遊環はもたない。鏡板の環状部分は、7.5×5.9cmの楕円形を呈するが、立聞が造り付けられる環体部分を欠損するため、立聞の痕跡を認めるに過ぎない。

同3は、引手で引手壺のほとんどを欠損する。引手軸は11.6cmほどである。同4は、街もしくは引手、同5・6は立聞の一部である。同2・3・6は、出土位置が近いことから、同一の轡である可能性が高い。

鎧（第27図1～3）

第27図1～3は鎧である。1は完存し、3の鎧吊金具が半分ほど欠損するため2と分離しているが同一個体であり、1と2・3は一対の鎧となるものである。いずれも鉄具に三連の兵庫鎖が連なり、その下に鎧吊金具が取りつく。1は全長35.7cmである。鉄具の輪金は中ほどでくびれる馬蹄形で、直線的な下部に兵庫鎖と刺金の端を巻き付けている。輪金は径0.6cmの断面が円形の鉄棒で造られており、長さ8.8cm、最大幅4.3cm、最小幅3.3cm、差し金も輪金とほぼ同じ径の鉄棒で造られており、長さ9.0cmを測る。兵庫鎖は三連式で、

径 0.7cm ほどの円形の鉄棒を折り曲げて造られており、一連の長さは 7.1~8.1cm、最大幅 2.3~3.1cm である。兵庫鎖に取りつく鎧吊金具は、U 字形の吊手部から敲き延ばして板状の脚部を造っており、厚さ 0.2cm ほどの鉄板に仕上げている。長さ 11.8cm を測り、ハ字状には大きく開かない形状である。両側に 3ヶ所ずつの鉄がみられ、長さは 2.3cm ほどである。同 2 は、1 と同様の形態であるが、輪金の形状がやや異なり、くびれがそれほど顕著ではなく、最小幅は下部にある。径 0.7cm の断面が円形の鉄棒で造られており、長さ 8.1cm、最大幅 4.3cm、最小幅 3.2cm、差し金も輪金とはほぼ同じ径の鉄棒で造られ、先端部を欠損し長さ 8.3cm を測る。兵庫鎖は 1 と同様の造りで、径 0.7cm ほどの円形の鉄棒で造られ、一連の長さは 7.2cm~7.7cm、最大幅 2.4~2.9cm である。同 3 は鎧吊金具で、半分ほどを欠損するが、1 の金具と同じ形態である。残存部からは鉄の数は明らかではないが、1 と同様に 3ヶ所であると思われる。

同 4・5 は紋具の輪金でいずれも中ほどでくびれる馬蹄形を呈する。

飾金具（第28図 1~9図）

第28図 1~4 は爪形の鉄製飾金具で、1 は 3ヶ所、2 は横並びに 3・4 は縦並びにそれぞれ 2ヶ所に円頭鉄が打たれている。

同 5・6 は、菱形の鉄製飾金具で 4ヶ所に円頭鉄が打たれている。

古鏡（第28図69）

石室内より出土した無背の寛永通寶で、古寛永。

c 装身具

金環（第28図10~13）

第28図10~13は金環で、大きさに 3種類あり、12・13は大きさもほぼ同じであり、一对になるものと思われる。いずれも中実の銅芯であるが、12・13のみ鍍金されている。

玉類（第28図14~68）

第28図14~26は土製丸玉で、長径 7.3~4.7mm、厚さ 3.6~6.0mm を測る。

同27~68はガラス小玉で、長径 4.15~1.8mm、厚さ 0.75~2.65mm を測る。いずれもブルー系の色調である。

d その他の遺物（第21図9~11）

第21図9は砾石、同10は小形の硯、同11は碁石で、いずれも後世の混入品である。

第1表 出土遺物觀察表(土器)

卷之三

地質	出土地點	層位	地質番号	地質名	岩相	透視・透視	厚さ (mm)	密度	比重	外面			色調	地土	含有物	塊成	角質
										高さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)					
1. 砂岩	1. 岩場	1. 岩場	1. 1	砂岩	1. 1	砂岩	1. 1	1.0	2.0	1. 1	1. 1	1. 1	白	白	白	60	無
2. 砂岩	2. 岩場	2. 岩場	2. 1	砂岩	2. 1	砂岩	2. 1	1.2	2.5	2. 1	2. 1	2. 1	白	白	白	60	無
3. 砂岩	3. 岩場	3. 岩場	3. 1	砂岩	3. 1	砂岩	3. 1	1.2	2.5	3. 1	3. 1	3. 1	白	白	白	60	無
4. 砂岩	4. 岩場	4. 岩場	4. 1	砂岩	4. 1	砂岩	4. 1	1.2	2.5	4. 1	4. 1	4. 1	白	白	白	60	無
5. 砂岩	5. 岩場	5. 岩場	5. 1	砂岩	5. 1	砂岩	5. 1	1.2	2.5	5. 1	5. 1	5. 1	白	白	白	60	無
6. 砂岩	6. 岩場	6. 岩場	6. 1	砂岩	6. 1	砂岩	6. 1	1.2	2.5	6. 1	6. 1	6. 1	白	白	白	60	無
7. 砂岩	7. 岩場	7. 岩場	7. 1	砂岩	7. 1	砂岩	7. 1	1.2	2.5	7. 1	7. 1	7. 1	白	白	白	60	無
8. 砂岩	8. 岩場	8. 岩場	8. 1	砂岩	8. 1	砂岩	8. 1	1.2	2.5	8. 1	8. 1	8. 1	白	白	白	60	無
9. 砂岩	9. 岩場	9. 岩場	9. 1	砂岩	9. 1	砂岩	9. 1	1.2	2.5	9. 1	9. 1	9. 1	白	白	白	60	無
10. 砂岩	10. 岩場	10. 岩場	10. 1	砂岩	10. 1	砂岩	10. 1	1.2	2.5	10. 1	10. 1	10. 1	白	白	白	60	無
11. 砂岩	11. 岩場	11. 岩場	11. 1	砂岩	11. 1	砂岩	11. 1	1.2	2.5	11. 1	11. 1	11. 1	白	白	白	60	無
12. 砂岩	12. 岩場	12. 岩場	12. 1	砂岩	12. 1	砂岩	12. 1	1.2	2.5	12. 1	12. 1	12. 1	白	白	白	60	無
13. 砂岩	13. 岩場	13. 岩場	13. 1	砂岩	13. 1	砂岩	13. 1	1.2	2.5	13. 1	13. 1	13. 1	白	白	白	60	無
14. 砂岩	14. 岩場	14. 岩場	14. 1	砂岩	14. 1	砂岩	14. 1	1.2	2.5	14. 1	14. 1	14. 1	白	白	白	60	無
15. 砂岩	15. 岩場	15. 岩場	15. 1	砂岩	15. 1	砂岩	15. 1	1.2	2.5	15. 1	15. 1	15. 1	白	白	白	60	無
16. 砂岩	16. 岩場	16. 岩場	16. 1	砂岩	16. 1	砂岩	16. 1	1.2	2.5	16. 1	16. 1	16. 1	白	白	白	60	無
17. 砂岩	17. 岩場	17. 岩場	17. 1	砂岩	17. 1	砂岩	17. 1	1.2	2.5	17. 1	17. 1	17. 1	白	白	白	60	無
18. 砂岩	18. 岩場	18. 岩場	18. 1	砂岩	18. 1	砂岩	18. 1	1.2	2.5	18. 1	18. 1	18. 1	白	白	白	60	無
19. 砂岩	19. 岩場	19. 岩場	19. 1	砂岩	19. 1	砂岩	19. 1	1.2	2.5	19. 1	19. 1	19. 1	白	白	白	60	無
20. 砂岩	20. 岩場	20. 岩場	20. 1	砂岩	20. 1	砂岩	20. 1	1.2	2.5	20. 1	20. 1	20. 1	白	白	白	60	無
21. 砂岩	21. 岩場	21. 岩場	21. 1	砂岩	21. 1	砂岩	21. 1	1.2	2.5	21. 1	21. 1	21. 1	白	白	白	60	無
22. 砂岩	22. 岩場	22. 岩場	22. 1	砂岩	22. 1	砂岩	22. 1	1.2	2.5	22. 1	22. 1	22. 1	白	白	白	60	無
23. 砂岩	23. 岩場	23. 岩場	23. 1	砂岩	23. 1	砂岩	23. 1	1.2	2.5	23. 1	23. 1	23. 1	白	白	白	60	無
24. 砂岩	24. 岩場	24. 岩場	24. 1	砂岩	24. 1	砂岩	24. 1	1.2	2.5	24. 1	24. 1	24. 1	白	白	白	60	無
25. 砂岩	25. 岩場	25. 岩場	25. 1	砂岩	25. 1	砂岩	25. 1	1.2	2.5	25. 1	25. 1	25. 1	白	白	白	60	無
26. 砂岩	26. 岩場	26. 岩場	26. 1	砂岩	26. 1	砂岩	26. 1	1.2	2.5	26. 1	26. 1	26. 1	白	白	白	60	無
27. 砂岩	27. 岩場	27. 岩場	27. 1	砂岩	27. 1	砂岩	27. 1	1.2	2.5	27. 1	27. 1	27. 1	白	白	白	60	無
28. 砂岩	28. 岩場	28. 岩場	28. 1	砂岩	28. 1	砂岩	28. 1	1.2	2.5	28. 1	28. 1	28. 1	白	白	白	60	無
29. 砂岩	29. 岩場	29. 岩場	29. 1	砂岩	29. 1	砂岩	29. 1	1.2	2.5	29. 1	29. 1	29. 1	白	白	白	60	無
30. 砂岩	30. 岩場	30. 岩場	30. 1	砂岩	30. 1	砂岩	30. 1	1.2	2.5	30. 1	30. 1	30. 1	白	白	白	60	無
31. 砂岩	31. 岩場	31. 岩場	31. 1	砂岩	31. 1	砂岩	31. 1	1.2	2.5	31. 1	31. 1	31. 1	白	白	白	60	無
32. 砂岩	32. 岩場	32. 岩場	32. 1	砂岩	32. 1	砂岩	32. 1	1.2	2.5	32. 1	32. 1	32. 1	白	白	白	60	無
33. 砂岩	33. 岩場	33. 岩場	33. 1	砂岩	33. 1	砂岩	33. 1	1.2	2.5	33. 1	33. 1	33. 1	白	白	白	60	無
34. 砂岩	34. 岩場	34. 岩場	34. 1	砂岩	34. 1	砂岩	34. 1	1.2	2.5	34. 1	34. 1	34. 1	白	白	白	60	無
35. 砂岩	35. 岩場	35. 岩場	35. 1	砂岩	35. 1	砂岩	35. 1	1.2	2.5	35. 1	35. 1	35. 1	白	白	白	60	無
36. 砂岩	36. 岩場	36. 岩場	36. 1	砂岩	36. 1	砂岩	36. 1	1.2	2.5	36. 1	36. 1	36. 1	白	白	白	60	無
37. 砂岩	37. 岩場	37. 岩場	37. 1	砂岩	37. 1	砂岩	37. 1	1.2	2.5	37. 1	37. 1	37. 1	白	白	白	60	無
38. 砂岩	38. 岩場	38. 岩場	38. 1	砂岩	38. 1	砂岩	38. 1	1.2	2.5	38. 1	38. 1	38. 1	白	白	白	60	無
39. 砂岩	39. 岩場	39. 岩場	39. 1	砂岩	39. 1	砂岩	39. 1	1.2	2.5	39. 1	39. 1	39. 1	白	白	白	60	無
40. 砂岩	40. 岩場	40. 岩場	40. 1	砂岩	40. 1	砂岩	40. 1	1.2	2.5	40. 1	40. 1	40. 1	白	白	白	60	無
41. 砂岩	41. 岩場	41. 岩場	41. 1	砂岩	41. 1	砂岩	41. 1	1.2	2.5	41. 1	41. 1	41. 1	白	白	白	60	無
42. 砂岩	42. 岩場	42. 岩場	42. 1	砂岩	42. 1	砂岩	42. 1	1.2	2.5	42. 1	42. 1	42. 1	白	白	白	60	無
43. 砂岩	43. 岩場	43. 岩場	43. 1	砂岩	43. 1	砂岩	43. 1	1.2	2.5	43. 1	43. 1	43. 1	白	白	白	60	無
44. 砂岩	44. 岩場	44. 岩場	44. 1	砂岩	44. 1	砂岩	44. 1	1.2	2.5	44. 1	44. 1	44. 1	白	白	白	60	無
45. 砂岩	45. 岩場	45. 岩場	45. 1	砂岩	45. 1	砂岩	45. 1	1.2	2.5	45. 1	45. 1	45. 1	白	白	白	60	無
46. 砂岩	46. 岩場	46. 岩場	46. 1	砂岩	46. 1	砂岩	46. 1	1.2	2.5	46. 1	46. 1	46. 1	白	白	白	60	無
47. 砂岩	47. 岩場	47. 岩場	47. 1	砂岩	47. 1	砂岩	47. 1	1.2	2.5	47. 1	47. 1	47. 1	白	白	白	60	無
48. 砂岩	48. 岩場	48. 岩場	48. 1	砂岩	48. 1	砂岩	48. 1	1.2	2.5	48. 1	48. 1	48. 1	白	白	白	60	無
49. 砂岩	49. 岩場	49. 岩場	49. 1	砂岩	49. 1	砂岩	49. 1	1.2	2.5	49. 1	49. 1	49. 1	白	白	白	60	無
50. 砂岩	50. 岩場	50. 岩場	50. 1	砂岩	50. 1	砂岩	50. 1	1.2	2.5	50. 1	50. 1	50. 1	白	白	白	60	無
51. 砂岩	51. 岩場	51. 岩場	51. 1	砂岩	51. 1	砂岩	51. 1	1.2	2.5	51. 1	51. 1	51. 1	白	白	白	60	無
52. 砂岩	52. 岩場	52. 岩場	52. 1	砂岩	52. 1	砂岩	52. 1	1.2	2.5	52. 1	52. 1	52. 1	白	白	白	60	無
53. 砂岩	53. 岩場	53. 岩場	53. 1	砂岩	53. 1	砂岩	53. 1	1.2	2.5	53. 1	53. 1	53. 1	白	白	白	60	無
54. 砂岩	54. 岩場	54. 岩場	54. 1	砂岩	54. 1	砂岩	54. 1	1.2	2.5	54. 1	54. 1	54. 1	白	白	白	60	無
55. 砂岩	55. 岩場	55. 岩場	55. 1	砂岩	55. 1	砂岩	55. 1	1.2	2.5	55. 1	55. 1	55. 1	白	白	白	60	無
56. 砂岩	56. 岩場	56. 岩場	56. 1	砂岩	56. 1	砂岩	56. 1	1.2	2.5	56. 1	56. 1	56. 1	白	白	白	60	無
57. 砂岩	57. 岩場	57. 岩場	57. 1	砂岩	57. 1	砂岩	57. 1	1.2	2.5	57. 1	57. 1	57. 1	白	白	白	60	無
58. 砂岩	58. 岩場	58. 岩場	58. 1	砂岩	58. 1	砂岩	58. 1	1.2	2.5	58. 1	58. 1	58. 1	白	白	白	60	無
59. 砂岩	59. 岩場	59. 岩場	59. 1	砂岩	59. 1	砂岩	59. 1	1.2	2.5	59. 1	59. 1	59. 1	白	白	白	60	無
60. 砂岩	60. 岩場	60. 岩場	60. 1	砂岩	60. 1	砂岩	60. 1	1.2	2.5	60. 1	60. 1	60. 1	白	白	白	60	無
61. 砂岩	61. 岩場	61. 岩場	61. 1	砂岩	61. 1	砂岩	61. 1	1.2	2.5	61. 1	61. 1	61. 1	白	白	白	60	無
62. 砂岩	62. 岩場	62. 岩場	62. 1	砂岩	62. 1	砂岩	62. 1	1.2	2.5	62. 1	62. 1	62. 1	白	白	白	60	無
63. 砂岩	63. 岩場	63. 岩場	63. 1	砂岩	63. 1	砂岩	63. 1	1.2	2.5	63. 1	63. 1	63. 1	白	白	白	60	無
64. 砂岩	64. 岩場	64. 岩場	64. 1	砂岩	64. 1	砂岩	64. 1	1.2	2.5	64. 1	64. 1	64. 1	白	白	白	60	無
65. 砂岩	65. 岩場	65. 岩場	65. 1	砂岩	65. 1	砂岩	65. 1	1.2	2.5	65. 1	65. 1	65. 1	白	白	白	60	無
66. 砂岩	66. 岩場	66. 岩場	66. 1	砂岩	66. 1	砂岩	66. 1	1.2	2.5	66. 1	66. 1	66. 1	白	白	白	60	無
67. 砂岩	67. 岩場	67. 岩場	67. 1	砂岩	67. 1	砂岩	67. 1	1.2	2.5	67. 1	67. 1	67. 1	白	白	白	60	無
68. 砂岩	68. 岩場	68. 岩場	68. 1	砂岩	68. 1	砂岩	68. 1	1.2	2.5	68. 1	68. 1	68. 1	白	白	白	60	無
69. 砂岩	69. 岩場	69. 岩場	69. 1	砂岩	69. 1	砂岩	69. 1	1.2	2.5	69. 1	69. 1	69. 1	白	白	白	60	無
70. 砂岩	70. 岩場	70. 岩場	70. 1	砂岩	70. 1	砂岩	70. 1	1.2	2.5	70. 1	70. 1	70. 1	白	白	白	60	無
71. 砂岩	71. 岩場	71. 岩場	71. 1	砂岩	71. 1	砂岩	71. 1	1.2	2.5	71. 1	71. 1	71. 1	白	白	白	60	無
72. 砂岩	72. 岩場	72. 岩場	72. 1	砂岩	72. 1	砂岩	72. 1	1.2	2.5	72. 1	72. 1	72. 1	白	白	白</td		

法量[]は現存値である。

第三章 地理學

第3表 出土遺物觀察表(金属製品)

法量()は復元実測値。〔 〕は現存値である。
A:全長 B: 滅身部分 C: 頭部部幅 D: 頭部長 E: 頭部幅

出土位置	圆版No.	種別	法量(cm)					重量(g)	備考
			A	B	C	D	E		
石室	22-1	把頭						[3.1]	31.05
石室	22-2	把頭						[3.6]	4.2
石室	22-3	頭刀						[4.4]	0.9
石室	22-4	頭刀						[13.5]	12.04
石室	22-5	頭刀						[7.9]	11.89
石室	22-6	頭刀						[17.4]	25.11
								[20.6]	15.38
								[12.5]	44.60
石室	22-7	頭刀						[3.6]	
								[7.6]	1.6-1.0
								[高さ16.8]	158.32
								[5.9]	
								[0.5]	
								[高さ5-2.5]	
								[1.9]	
								[1.7]	
石室	22-8	貴金属						[4.6]	7.06
石室	22-9	貴金属						[3.3]	2.46
石室	22-10	銀合金鋼製品						4.5	銅鑄片
石室	23-1	頭鉗	17.2	[2.7]	0.9	9.4	[5.1]		14.32
石室	23-2	頭鉗	[17.0]	2.8	1.0	9.1	[5.1]		15.02
石室	23-3	頭鉗	[16.5]	2.6	0.9	9.0	[4.9]		18.80
石室	23-4	頭鉗	[16.2]	[2.0]	0.9	9.3	[4.9]		13.73
石室	23-5	頭鉗	[15.4]	2.7	[1.0]	9.3	[3.4]		11.06
石室	23-6	頭鉗	[18.6]	3.3	1.2	8.5	[6.8]		14.77
石室	23-7	頭鉗	[16.0]	3.1	1.2	8.7	[4.2]		16.77
石室	23-8	頭鉗	[15.3]	3.2	1.1	[9.2]	[2.8]		14.84
石室	23-9	頭鉗	[14.8]	2.9	1.2	8.3	[3.6]		14.82
石室	23-10	頭鉗	[14.1]	2.8	1.0	8.1	[3.2]		11.92
石室	23-11	頭鉗	[14.0]	3.5	1.1	8.8	[1.7]		14.64
石室	23-12	頭鉗	[13.2]	3.2	0.8	[8.6]	[4.4]		10.03
石室	23-13	頭鉗	[12.9]	2.8	0.9	9.4	[0.7]		12.40
石室	23-14	頭鉗	[12.5]	3.0	1.1	8.1	[1.4]		9.61
石室	23-15	頭鉗	[12.2]	2.3	[0.8]	7.1	[2.8]		6.56
石室	23-16	頭鉗	[11.5]	3.1	1.2	7.0	[1.4]		9.09
石室	23-17	頭鉗	[10.7]	[1.6]	[1.1]	8.1	[1.0]		11.23
石室	23-18	頭鉗	[15.1]	2.5	0.9	8.5	[4.1]		13.46
石室	23-19	頭鉗	[17.8]	[2.4]	[0.9]	9.1	[6.3]		14.25
石室	24-1	頭鉗	18.0	2.8	0.9	10.2			14.84
石室	24-2	頭鉗	20.1	2.9	1.3	8.9	8.3		22.09
石室	24-3	頭鉗	[14.9]	3.3	1.1	8.0	[3.6]		8.48
石室	24-4	頭鉗	[15.3]	3.2	0.9	[8.5]	[3.6]		13.32
石室	24-5	頭鉗	[10.9]	[0.7]	0.1	6.3	[3.9]		6.64
石室	24-6	頭鉗	[13.2]	3.2	[0.9]	[8.0]	[2.0]		7.67
石室	24-7	頭鉗	[17.7]	2.4	1.1	10.3	[5.0]		16.90
石室	24-8	頭鉗	[17.5]	1.7	[0.8]	10.8	[4.8]		14.32
石室	24-9	頭鉗	[12.1]	2.5	0.9	9.3	[0.8]		7.85
石室	24-10	頭鉗	[18.0]	[2.2]	[1.1]	9.6	[6.2]		20.14
石室	24-11	頭鉗	[16.5]	2.8	1.2	8.9	[4.6]		14.73
石室	24-12	頭鉗	[15.9]	2.8	0.9	9.0	[4.6]		10.47
石室	24-13	頭鉗	[14.1]	3.6	0.8	[9.8]	[10.1]		9.95
石室	24-14	頭鉗	[7.7]	3.1	1.2	[4.6]			4.45
石室	24-15	頭鉗	[5.4]	[3.0]	[0.9]	[0.4]			1.85
石室	24-16	頭鉗	[2.2]	2.2	[0.9]				1.65
石室	24-17	頭鉗	[3.5]	[1.9]	1.7	[7.6]			2.96
石室	24-18	頭鉗	9.0	1.8	[1.0]	[7.2]			8.63
石室	24-19	頭鉗	6.6	2.5	1.0	4.1			6.10
石室	25-1	頭鉗	[2.8]	2.8	1.2				2.76
石室	25-2	頭鉗	[4.4]	0.8	1.1	[3.6]			3.31
石室	25-3	頭鉗	[7.8]	2.9	1.0	4.9			6.29
石室	25-4	頭鉗	[3.4]	2.8	1.1	[0.6]			2.36
石室	25-5	頭鉗	[3.5]	[3.5]	1.2				3.01
石室	25-6	頭鉗	[2.6]	2.6	1.1				1.60
石室	25-7	頭鉗	[4.1]	[4.1]	[1.1]				3.44
石室	25-8	頭鉗	[7.0]	[0.9]					5.48
石室	25-9	頭鉗	[14.6]		[7.3]	[7.3]			13.68
石室	25-10	頭鉗	[12.5]		[5.9]	[6.6]			11.56
石室	25-11	頭鉗	[12.4]		[8.6]	[3.8]			7.14
石室	25-12	頭鉗	[11.1]		[7.8]	[3.3]			11.90
石室	25-13	頭鉗	[11.7]		[7.5]	[4.2]			7.18
石室	25-14	頭鉗	[10.6]		[6.0]	[4.6]			7.61
石室	25-15	頭鉗	[8.9]		[4.3]	[4.6]			5.80
石室	25-16	頭鉗	[8.8]		[4.4]	[4.4]			6.32
石室	25-17	頭鉗	[5.5]		[4.7]	[0.8]			5.39
石室	25-18	頭鉗	[5.0]		[1.2]	[3.8]			2.77
石室	25-19	頭鉗	[9.9]		[6.3]	[3.6]			9.87
石室	25-20	頭鉗	[7.6]		[2.8]	[4.8]			5.08
石室	25-21	頭鉗	[9.4]		[5.0]	[4.4]			9.43
石室	25-22	頭鉗	[9.0]						6.29
石室	25-23	刀子					[15.0]	1.8	0.5
石室	25-24	刀子					[5.3]	[1.4]	0.2
石室	25-25	刀子					[5.6]	[1.4]	0.6
石室	25-26	刀子					[4.6]	1.2	0.7

出土位置	図版No.	種別	法量(cm)						重量 (g)	備考	
			A	B	C	D	E	計測部位	長さ・幅	幅	
石室	26-1	帶						體	7.2×6.4	7.5×6.6	
								鏡板	長さ:4.6 幅:3.5	長さ:4.3 幅:3.5	381.80
								鏡(2連)	長さ:6.1	長さ:6.7	
								肩輪	径:3.7	径3.3×3.6	
								引手	長さ:17.3	長さ:17.3	
								體	7.4×6.5		
石室	26-2	帶						鏡	長さ:[9.6]	長さ:[7.2]	72.90
石室	26-3	引手						[6.5]			55.50
石室	26-4	引手もしくは 環						[3.6]	[1.3]	0.5	3.24
石室	26-5	文開合						[3.2]	0.9	0.5	2.82
石室	26-6	文閉合						全員	35.7		
石室	27-1	鏡						長座鏡(3連)	17.4		
								鏡の1単位	長さ:7.1~8.1	3.0	312.14
								鏡	8.8	4.3	
								馬金具	11.8	1.7	
								金具	23.6		
								長座鏡(3連)	17.3		270.32
石室	27-2	鏡						鏡の1単位	長さ:7.2~7.7	3.0	
								段員	8.1	4.9	
								(12.0)	(3.8)	(15.64)	
								[5.9]	[2.7]	0.7	7.52
								5.3	3.8		8.94
								3.4	2.5		6.41
石室	27-3	鏡の馬金具						[2.6]	2.7		5.55
石室	27-4	段員						[3.4]	[2.6]		7.27
石室	27-5	段員						[4.2]	2.7		5.70
石室	28-1	馬金具						3.5	4.7		32.42
石室	28-2	馬金具						3.3	4.8		23.29
石室	28-3	馬金具						長さ:[1.9]	頭部径:[1.1]		3.51
石室	28-4	馬金具						長さ:[2.0]	頭部径:[1.2]		3.75
石室	28-5	馬金具(鏡)						長さ:[2.2]	頭部径:[1.0]		2.18
石室	28-6	馬金具						3.4		0.8	32.01
石室	28-7	馬金具(鏡)						2.9		0.7	青銅製
石室	28-8	馬金具(鏡)						1.7		0.4	青銅製
石室	28-9	馬金具(鏡)						1.8		0.4	金銅製
石室	28-10	金環									金銅製
石室	28-11	金環									
石室	28-12	金環									
石室	28-13	金環									
石室	28-14	古鏡									
石室	28-15	古鏡						21.5	丸:0.6	4.25	「覧水通質」 古鏡集

第4表 出土遺物観察表(玉)

図版No.	種別	Grid	径(mm)		孔径(mm)		厚さ(mm)	重量(g)	色調
			長径	短径	長径	短径			
28-14	土玉	N-9	6.7	-	1.6	-	6.0	0.2817	黒(10YR2/1)
28-15	土玉	N-6	7.0	-	1.0	-	6.0	0.2757	黒褐色(10YR3/1)
28-16	土玉	N-7	6.4	-	1.3	-	4.9	0.1895	黒(10YR2/1)
28-17	土玉	S-10	7.3	6.1	1.6	-	4.6~4.9	0.1935	黒褐色(10YR3/1)
28-18	土玉	N-9	6.2	5.8	1.6	1.3	4.5~4.9	0.1743	黒(10YR2/1)
28-19	土玉	N-7	6.5	5.1	1.7	1.0	5.2	0.1735	黒褐色(10YR3/1)
28-20	土玉	N-7	5.6	5.2	0.8	-	4.6	0.1324	黒褐色(10YR3/1)
28-21	土玉	N-9	5.4	-	1.6	1.2	4.2	0.1358	黒(10YR2/1)
28-22	土玉	N-9	5.4	-	1.3	-	4.2~4.5	0.1407	黒(10YR2/1)
28-23	土玉	N-12	4.7	-	1.2	-	3.6~4.0	0.0877	黒(10YR2/1)
28-24	土玉	S-10	4.8	-	1.3	-	4.0~4.3	0.1036	黒褐色(10YR3/1)
28-25	土玉	N-8	5.0	-	1.2	-	3.6~4.3	0.1073	黒(10YR2/1)
28-26	土玉	N-8	5.0	-	1.5	1.3	3.7~4.4	0.1066	黒(10YR2/1)
28-27	ガラス玉	S-8	3.9	3.55	1.05	0.95	2.65	0.0471	ナイトブルー
28-28	ガラス玉	S-9	3.55	3.25	1.15	1.0	2.05	0.0261	黒(2PB3/5)
28-29	ガラス玉	S-9	3.55	-	1.0	-	2.2	0.0344	黒(2PB3/5)
28-30	ガラス玉	S-9	3.4	-	0.9	0.75	1.85~2.15	0.0292	黒(2PB3/5)
28-31	ガラス玉	S-9	3.25	-	0.9	-	2.15	0.0307	黒(2PB3/5)
28-32	ガラス玉	S-9	3.4	3.2	1.0	0.9	2.15	0.0294	黒(2PB3/5)
28-33	ガラス玉	S-10	3.35	3.2	0.9	-	2.5	0.0341	黒(2PB3/5)
28-34	ガラス玉	S-10	3.15	-	1.1	-	2.4	0.0274	黒(7.5B4.5/4.5)
28-35	ガラス玉	S-10	3.2	-	-	1.0	1.0	0.0215	黒(7.5B4.5/4.5)
28-36	ガラス玉	S-9	3.2	3.0	1.3	1.15	1.9	0.0190	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-37	ガラス玉	N-1	3.3	-	1.1	-	1.5	0.0217	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-38	ガラス玉	N-2	3.5	-	1.2	-	1.5	0.0238	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-39	ガラス玉	S-2	3.55	-	1.25	0.95	1.9	0.0295	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-40	ガラス玉	S-2	3.35	-	1.05	0.9	1.95	0.0304	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-41	ガラス玉	S-2	3.6	-	1.15	1.0	1.85	0.0288	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-42	ガラス玉	S-2	3.65	-	1.05	-	1.5~1.85	0.0287	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-43	ガラス玉	S-2	3.4	-	1.3	1.1	1.65	0.0250	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-44	ガラス玉	S-9	4.15	3.7	1.15	0.8	1.9~2.55	0.0488	青緑(5B6G5/10)
28-45	ガラス玉	S-10	3.6	3.3	1.4	1.1	1.0~1.9	0.0277	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-46	ガラス玉	N-10	2.5	-	0.9	-	1.15~1.6	0.0119	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-47	ガラス玉	N-10	2.55	2.4	1.1	1.0	1.15~1.35	0.0110	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-48	ガラス玉	N-10	2.0	1.85	0.9	0.8	2.15	0.0124	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-49	ガラス玉	N-11	2.5	-	0.9	-	2.15	0.0154	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-50	ガラス玉	N-9	2.15	-	0.75	-	1.65	0.0119	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-51	ガラス玉	N-9	2.45	-	1.1	0.9	1.4~1.7	0.0117	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-52	ガラス玉	N-10	2.0	-	0.75	-	2.0	0.0118	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-53	ガラス玉	N-10	2.25	2.1	0.95	0.85	1.65	0.0111	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-54	ガラス玉	N-10	2.2	-	1.0	0.9	1.25~1.8	0.0104	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-55	ガラス玉	N-10	2.2	2.05	0.6	-	1.65	0.0111	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-56	ガラス玉	石室一括	2.4	-	1.1	0.85	1.35	0.0098	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-57	ガラス玉	石室一括	1.95	1.85	0.7	-	1.25	0.0063	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-58	ガラス玉	石室一括	1.95	-	0.65	-	1.15	0.0053	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-59	ガラス玉	石室一括	1.85	1.25	0.65	-	0.9	0.0033	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-60	ガラス玉	石室一括	2.15	2.0	1.0	0.85	0.75~0.95	0.0040	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-61	ガラス玉	S-10	1.9	-	0.55	-	1.35	0.0057	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-62	ガラス玉	S-10	1.8	-	0.7	-	0.75	0.0029	ナイトブルー(10B6G5/5.5)
28-63	ガラス玉	S-9	[3.6]	-	[1.0]	-	2.3	0.0205	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-64	ガラス玉	S-9	-	-	-	-	1.8	0.0103	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-65	ガラス玉	S-9	-	-	-	-	2.35	0.0116	チャコスブルー(IPBS4/4.5)
28-66	ガラス玉	S-9	[3.05]	-	-	-	1.8	0.0094	黒(2PB3/5)
28-67	ガラス玉	S-9	-	-	-	-	2.5	0.0095	黒(2PB3/5)
28-68	ガラス玉	S-9	-	-	-	-	-	0.0065	黒(2PB3/5)

第4章 総括

第1節 長田1号墳の築造年代

長田1号墳からはさまざまな遺物が出土しているが、年代の考定には須恵器がもっとも有効であることは言うまでもない。

坏蓋は3点確認されており、かえりをもたないものが2点（第19図17・18）、返りをもつものが1点（同19）である。かえりをもつもののつまみは不明である。かえりをもたない2点は、口径に比して器高はそれほど高くはない。

坏身は4点（同20～23）出土しているが、いずれも小破片であるが、口径はすべて12.1cmほどである。

無蓋長脚二段透高坏（同24）は、脚中ほどに二重の沈線を巡らせ、2段としている。上下段とも三方に透しをもち、上段の透しはスリット状で幅1mmほどである。坏部外面には二段の稜をもつ。これらの特徴を有する高坏の類例として、静岡市賤機山古墳、島田市白岩寺2号墳、磐田市脈塚古墳出土例などを挙げることが出来る。

龜のうち、胴部を欠損し頭部から口縁部のみの資料（第20図1）は、口縁部に向かい大きく開くもので、口縁部、頭部に沈線文を巡らせ区画内に櫛歯状工具による斜状沈線文、斜状刺突文を施している。これに類似した例として、白岩寺2号墳、藤枝市南新屋A1号墳出土例がある。

壺部に一重の沈線を巡らせている有蓋脚付長頸壺（同4）は、脚部に一段の三方透をもつ。形態的には口縁部は短く肩部が張るなど、やや新しい傾向を示すが、脚部には透をもち透しの形は異なるものの磐田市新林1号墳出土例と類似する。

提瓶も欠損しているものの環状の把手を有し、古相を示している。

以上みてきたように、賤機山古墳、白岩寺2号墳出土例などに類例をもつ須恵器が多く出土しており、これらは、陶邑編年のTK43ないしそれに先行するTK10形式、湖西窯を中心とした遠江須恵器編年（鈴木2001）の遠江Ⅲ期前葉から中葉の所産と考えてよい。ただし、坏類のうちかえりをもつ坏蓋（第19図19）および坏身（同21～23）、龜胴部資料（第20図2）には新しい様相がみえ、次段階のTK209型式期に比定されるもので、追葬時の遺物だと考えられる。また、胴部および口縁部を欠損し形状は不明であるが、平瓶の底部（第21図4）は平底となるため、7世紀代以降のものだと思われる。

よって、本墳は、6世紀後半でも比較的早い段階に築造され、7世紀代まで追葬されたものと考えてよい。また、石室内より奈良・平安時代の土師器や縁釉陶器、寛永通寶なども出土していることから、奈良・平安時代以降も使用された痕跡を何うことが出来るが、墓として使用されかどかは明らかではない。

第2節 出土遺物について

本墳からは、総体量は多くはないものの、多種の須恵器が出土している。坏類の点数が少ないものの、良好なセット関係として捉えることが出来る。

本墳出土の無蓋長脚二段透高坏および有蓋脚付長頸壺は非常に焼成が良好で、硬質感があり断面はセビア色を呈している。賤機山古墳出土須恵器には焼成が良好で硬質なものとそうでないものがあり、本墳出土の資料は、賤機山古墳出土の焼成が良好な資料と類似しているという。ただし、产地については駿河東部地域の可能性もあるものの、不明といわざるを得ない。

本墳出土須恵器については、湖西産と認定できるものがほとんどないのに対し、隣接する四ツ塚古墳群や国分築地古墳群の出土品には湖西産が多数を占めるという状況にある。⁽¹⁾

これは、本墳の築造および主体となる須恵器が6世紀後半でもやや早い段階のものであり、四ツ塚古墳群、国分築地古墳群がやや遅れて造墓活動を開始したことによって、6世紀末から7世紀にかけての遺物が主体

を占めることによる違いと捉えることもできる。甲府盆地において湖西産須恵器が主体を占めるようになるのは、本墳築造以降の6世紀末以降か7世紀代になってからの可能性が高い。

本墳より出土した須恵器は、石室内および前庭部周辺より出土している。大形の竈および有蓋脚坏長頸壺は石室内および前庭部からまとめて出土しており、当初より前庭部と石室内に分け置かれた可能性もあるため明らかにできないが、提瓶ならびに無蓋高坏は石室内のみから出土している。提瓶は打ち欠いた痕跡が認められるが、ほぼ原形をとどめた状態で閉塞部付近に置かれていた。

山梨県内の横穴式石室墳の多くが壺を中心とした須恵器を伴うが、石室内に副葬する例は少なく、そのほとんどが前庭部付近から出土している。本古墳群の調査においても同様な状況にあり、前庭部付近から出土する例が多くを占めた。とくに入口付近の左側より出土する例が多く見受けられた。本墳では、入口右側が大きく削平されており、入口右側において土器の配置があったかどうかを明らかにすることは出来ないが、入口が残存していた左側においては、破碎された土器が散乱していた。前庭部前面は、烟境のため削平され石垣が積まれていたが、石垣裏込中より入口左側に集中して土器が出土した。これらのことから、本墳でも前庭部における土器の配置は同様な状況であったことが想定される。

このような土器の在り方は、四ツ塚古墳群の調査においても前庭部の西側（左側）に集中することが報告されており、両古墳群が共通する認識をもって葬送儀礼を行っていたことが想定される。国分古墳群でも、須恵器は前庭部および付近の周溝から出土しているという報告があり、甲斐市竜王2号墳においても、「すべて前庭部西側の現墳丘裾部から、表土層を除去した段階で出土した」と報告されている。前庭部西側は左側にあたり、同様な例とも考えられるが、遺物出土位置が前庭部付近のかやや離れた位置なのかは詳細な記述がないため不明である。

石室内に土器類が配置される例として、甲府市稻荷塚古墳では、左片袖付近より提瓶、竈が、市川三郷町一条氏館跡古墳からも、提瓶、有蓋壺の蓋が残存した主体部より出土しており、本墳とともに稀有な例といえる。

鉄鎌を伴う後期古墳の例は多いが、甲府盆地において築造時期が本墳に近く内容がある程度明らかになっている古墳と本墳出土遺物の中で鉄鎌について比較することとする。

本墳出土の鉄鎌は、50点近くが出土しているが、形態的にはそれほどバラエティーに富んではない。柳葉式・撫閏三角型式鎌が多くみられ、片刃式鎌は2点のみ確認されている。いずれも細根系の鉄鎌で平根系の鉄鎌は1点もみられない。

本墳と築造時期が近い古墳に、甲府市考古博物館構内古墳、同稻荷塚古墳、笛吹市平林2号墳、一条氏館跡古墳などがある。

考古博物館構内古墳は、全長6.55mの無袖式の横穴式石室墳である。須恵器には新しい様相が認められるが、出土した土師器、馬具の一部に6世紀前半代の様相が伺えることから、6世紀前半代の築造が想定されている。出土遺物には、土師器・須恵器のほか、鉄装の円頭把頭をもつ直刀、弓、鉄鎌、甲冑小札類、馬具、装身具などが知られる。鉄鎌は、腸抉柳葉式、五角形式、三角型式が28本ほど発見されているが、細根式に属する鑿箭系（本報告で分類した柳葉式に類似）の鉄鎌は9本と前者が多数を占める。

中道地域で考古博物館構内古墳の次代の有力墳と目されるのは、丘陵上に位置する稻荷塚古墳である。玄室長6m、羨道長2.2mの左片袖式の横穴式石室を有する径20mの円墳である。出土遺物には、土師器・須恵器のほか、銀象嵌装飾円頭大刀、鉄鎌、甲冑小札類、馬具、銅鏡、装身具などがある。出土遺物から7世紀前半代の築造と考えられる。稻荷塚古墳出土の鉄鎌には、平根式と細根式が混在する。報告書では多くを平根式に分類しているが、多くは細根式に属するもので柳葉式、三角型式などがみられる。平根式には五角形式、柳葉式などが6点ほどみられる。

平林2号墳は、現状で41基が確認されている盆地北東部地域の春日居古墳群中の1基である。主体部は斜面下方に向かって開口する全長8.6mの無袖式横穴式石室をもち、奥壁寄りは地山を掘り窪め、主体部を構築している。出土遺物には、土師器・須恵器のほか、青銅製鏡金把頭をもつ直刀、鉄鎌、甲冑小札類、馬具

類、玉類、青銅鏡（珠文鏡・重圓文鏡）などがある。鉄鎌は24点以上出土しているが、平根式には三角形式、五角形式などが計10点ある。残りは片刃箭式、整箭式などの細根系の鉄鎌である。

一条氏館跡古墳は、埴丘および石室のほとんどを削平され、埴丘、石室規模ともに不明であるが東に開口する横穴式石室の残骸が検出された。石室内より須恵器とともに直刀、鉄鎌、馬具、金環などが出土している。鉄鎌は10点ほどあり、いずれも細根系の鉄鎌であり、平根系は確認されていない。古墳から40mほど西には、長軸で2.34m、短軸で1.41mの長方形を呈した浅い掘り込みをもつ土坑が発見されている。土坑南東隅からは、鉄鎌が20本ほどまとめて出土していることから墓壙であると考えられる。他に出土遺物はなく、年代の特定はできないが、鉄鎌の形態は古墳出土のものに近いことから、6世紀後半段階のものとみてよいかもしれない。鉄鎌には、五角形式と三角形式の平根式鎌が4点、細根系の両刃式が6点、片刃式が10点と細根系が多数を占める。

以上、本墳を前後する時期に築造された古墳から出土した鉄鎌を概観したが、各古墳の残存状況に差はあるにせよ、残存状況が極めて悪い一条氏館跡古墳例を除き、いずれの古墳も細根系の鉄鎌を基調としながらも平根系の鉄鎌が一定量出土していることが理解される。

本古墳出土例とは細根系の鉄鎌においては共通点もみられるものの、本墳では平根系の鉄鎌は1点も確認されておらず、この点については様相を異にする。これが、本墳出土鉄鎌の特徴となっているが、これが何に起因するのかは明らかではない。

本墳からは2点の轡が出土しており、いずれも板状立聞素環鏡板付轡である。坂本美夫氏によれば、鏡板の環径と立聞の長さの比によって時期的な変遷を追うことが出来るという（坂本1985）。本墳出土の轡のうち、1点（第26図2）は立聞が欠損しており計測不能であるが、第26図1は、その比が0.47ほどとなり、6世紀第4四半世紀頃にあたり、出土須恵器から想定された本墳の築造時期と齟齬はない。

また、木製壺蓋の鏡軸部は山梨県内においてそれほど出土例は多くはなく、一条氏館跡古墳、平林2号墳、笛吹市米倉無名墳、稲荷塚古墳から出土している。稲荷塚古墳例は、兵庫鎖を用いず環状の鉄を4本に折り曲げて鉗具と縁金具を連結している。一条氏館古墳例、平林2号墳例はともに本墳出土例と同様に兵庫鎖を用いて連結しているが、それぞれ3連と4連の兵庫鎖を用いている。一条氏館跡古墳例は兵庫鎖の大きさも7~8cmほどと本古墳例と類似しているが、平林2号墳例は鎖が4~5cmと短く、連結した鎖の長さは13cmほどで、本古墳例の21cmほどと大きな隔たりがある。形態的に類似した一条氏館跡古墳は、残存状況が悪く副葬品の全容は明らかではないが、ボタン状の把手をもつ提瓶、長頸壺の蓋が出土しており、本墳と時期的には近接しているものと考えられる。

第3節 長田古墳群の位置づけ

山梨県内の後期古墳は、甲府盆地の南に位置する峠南地域、八ヶ岳南麓地域、郡内と呼ばれる山梨県東部地域のうち富士北麓に近い南部地域においてはその存在が知られていないが、その他の地域には密度の差はあるものの、全域に分布する。

山梨県域の中央に位置する甲府盆地においては、盆地縁辺域を中心に多くみられる傾向にあるが、とくに分布が集中する地域が5か所ほどみられる（宮澤1989）。

笛吹市境川町（旧境川村）・八代町、甲府市下曾根町（旧中道町）、中央市（旧豊富村）、市川三郷町（旧三珠町）などを中心とした曾根丘陵上に展開する盆地南東部地域、笛吹市一宮町・御坂町を中心とする盆地東部地域、山梨市と笛吹市春日居町を中心とした盆地北東部地域、甲府市東部と笛吹市石和町を中心とした盆地北縁部地域、甲府市北西部と甲斐市（旧竜王町・旧敷島町・旧双葉町）を中心とした盆地北西部地域に濃密な分布がみられる（第4図）。

本墳が属する長田古墳群は、そのうちの盆地東部地域に位置する。第2章でも触れたように、本古墳の位置する金川扇状地上には数多くの古墳が占地している。

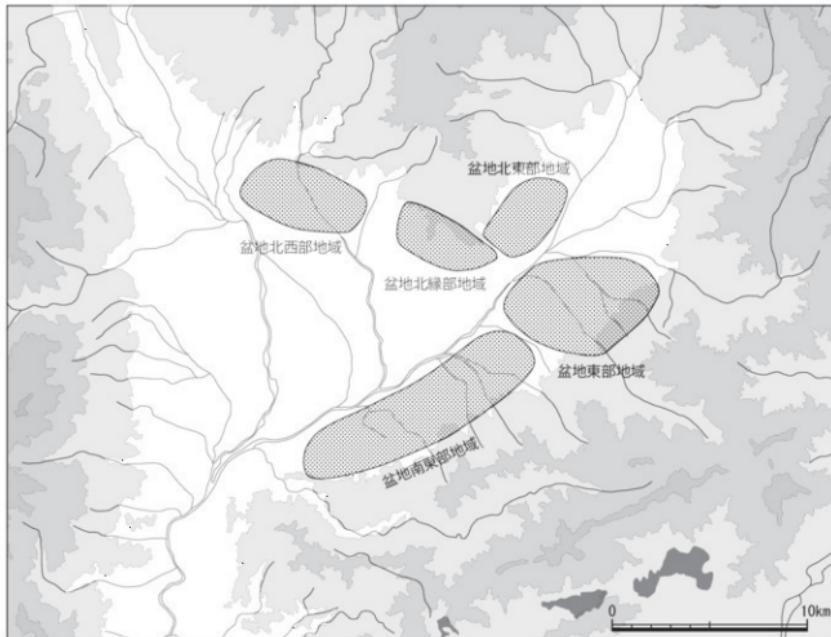
長田古墳群の下位の南西に向かう緩斜面上に四ツ塚古墳群が位置している。南東に開口する横穴式石室がほとんどであり、主軸を N - 13° - E 前後に採るものが多くを占める。石室規模は、両袖式のプランを呈する 5・6 号墳がいずれも全長 5.8 m ほどと最大規模となるが、4 m 前後の主体部をもつものが多数を占める。その中には 13 号墳のように 1.35 m の小石室墳もみられる。

本古墳群は、出土遺物から 6 世紀後葉から 7 世紀中葉を中心とした時期に造営されたものと考えられ、7 世紀代を主体とした四ツ塚古墳群などよりは、やや早い段階に造墓活動を開始したものと思われる。これは両古墳群の石室規模の格差からも推定されるところである。また、国分古墳群においてこれまで調査され明らかになっている資料からは、長田古墳群より群形形成の時期が遅れるものと考えられる。

甲府盆地において、後期古墳を群として認識できるものは多数存在するが、密集して群を形成するのは、盆地北縁部に展開する横根・桜井積石塚古墳群ならびに金川扇状地上に展開する古墳群である。その扇状地上にあって比較的早い段階に造墓活動を開始したのが長田古墳群であるといえる。

35基の古墳が発掘調査された長田古墳群は、出土遺物の整理作業が終了していないことから、全容を把握できていないが、本墳出土例を除き 6 世紀代に遡る遺物が少ないと、古墳群中本墳が最大規模を誇ること、古墳群中の最低位に位置することなどから、6 世紀後半に築造された本墳をもって古墳群の形成を開始したものと考えられる。

石室形態は、比較的小型の用材を用いて小口なし横口に積んだ狭長な無袖式の石室が初現期の古墳に採用され、大型の用材を立て石積みした有袖式の石室へ、最終的には無袖式の小規模な堅穴式の單次埋葬施設へという大まかな変遷を追うことができよう。古墳群は 5 つほどにグルーピングできるが、それぞれに中核となるような大形の古墳がみられ、小形の古墳が隣接している状況がみてとれる。本古墳群中最古と考えら



第4図 甲府盆地における後期古墳分布

れる本墳は、群中最下位に位置し、比較的新しい20号墳などは上位に位置することから、グループの形成過程は下流域から上流域へ遡る形で展開していくことが想定される。

無袖式の横穴式石室墳が初期の後期古墳に採用されるのは、横根・桜井積石塚古墳群の横根39号墳や大藏經寺山15号墳の例などがあり、本古墳群に限ったことではない。

金川対岸に展開する国分塚地古墳群は、自然堤防上を下流から上流へ向かい、石室規模の大きいものから小さいものへ、形式の古いものから新しいものへと変化していくことが想定されており（山梨大学考古学研究会 1974）、本古墳群についても同様な様相を示すものといえる。

第1章第4節でも触れたが、長田古墳群中には、甲府盆地では類例のない主体部を有する古墳が発見されている。

F-1号墳は、主体部のほとんどが地下に構築される半地下式の横穴式石室墳であった。微高地状の地山を南北 58 m、東西 25 m、深さ 16 m ほどの規模で掘りくぼめ、石室の構築を行っている。側壁最上部の用材および天井石がわずかに地山から露出する程度であった。石室は全長 53 m、玄室長 43.3 m、幅は奥壁部で 1.25 m、中央部で 1.45 m ほどを測り、胴張型のプランを呈する無袖式横穴式石室であった。奥壁、側壁とも自然石の乱石積みであるが、小形の用材を用いて横口ないし小口を基調として積み上げている。閉塞部の石室幅は 1.2 m ほどであるが、閉塞部基底部石材の幅は 0.9 m ほどもあり、石室構築段階において閉塞石も配置されたものと思われ、玄室と入口部に明確な段差をもつ。また、前庭部は地山土を削り出しており入口部へ向かって緩やかに下っていた。前庭部に置かれた須恵器は TK209 型式期であり、6世紀末段階に築造されたものと考えられる。このような特徴をもつ横穴式石室は、「段構造をもつ古墳」と称され、東駿河地域の富士市を中心に、富士川町、沼津市、清水町、旧富士川町に限定的に分布している。段構造をもつ古墳は、駿河地域でも初現期からみられ、富士市中原 4 号墳例などから TK10~43 型式期、遠江Ⅲ期前葉から中葉に出現しているという（菊池 2010）。

このような形態の主体部は、竪穴系横穴式石室と関連があるとされるが、甲府盆地内では系統的に追うことが出来ないことから、これらの地域からもたらされた形態であるといえよう。F-1号墳の時期はやや遅れ、TK209 型式期の所産であるが、現状では甲府盆地では唯一の事例で、継続性は認められない。先の中原 4 号墳からは、鍛冶具である鉄鉗、釘子の可能性がある大形の針状鉄器などを出土しており、「手工業生産に長け、朝鮮半島と繋がりをもった人物」が被葬者の可能性がることが想定されている（鈴木 2010）。

古墳群中最上位に位置する20号墳は、両袖式の石室に直交する玄室を付設した、いわゆる T 字形横穴石室と呼ばれる主体部を持つ古墳であった。墳丘径 25 m ほどを測り、墳丘には 4 段の外護列石が認められた。主体部は著しく破壊を受けており、基底部の石積みのみ残されていた。石室全長 7.5 m、後室長 1.1 m、幅 2.7、前室長 4.8 m、幅 1.5 m、羨道長 1.7 m、幅 1 m ほどを測り、両袖式のプランを呈する。前室と後室の境には玄門のように扁平な石を立て、区画を囲っている。奥壁および側壁のほとんどは扁平な石を立石積みしている。前庭部は八字状に広がり、敷石を有する。盜掘にあったようで、石室内から遺物はほとんど発見されず、わずかに前庭部から須恵器高盤、金銅製鉄具などが出土したにすぎない。古墳の築造時期は検討を要するが、前庭部の出土遺物は 7 世紀後半に位置づけられるものである。本墳は古墳群中最上位に位置し、石室の小型化傾向にあるこの時期にあって非常に大型の石室墳とすることができとともに、石室形態や規模から古墳群内での位置づけや、被葬者の性格づけも含め注目される古墳である。

T 字形石室墳は、山梨県の周辺地域をみても静岡県内では浜松市恩塚山 A 7 号墳が唯一の例として、長野県内でも茅野市疱瘡神塚古墳・姥塚古墳などが知られるのみである。姥塚古墳については、副室をもつ竪穴系石室であるとの指摘もある。T 字形石室については、渡来系氏族との関連も指摘されているが、周辺地域との関連性も含め 20 号墳の被葬者の性格については不明といわざるを得ない。

長田古墳群の評価については、長田古墳群全体の整理作業が完了したした時点で再度検討することとしたい。

註

- (1) 静岡県内の古墳出土須恵器および湖西産須恵器については、浜松市教育委員会鈴木敏則氏にご教示いただいた。

参考文献

- 赤城 剛 1994「東三河地域の後期古墳出土鉄鎌」「東三河の横穴式石室 資料編」(『三河考古』第6号)
- 三河考古学談話会
- 稻垣自由・平林大樹 2013「宮谷金山古墳の出土品について」『山梨県考古学協会誌』 第22号 山梨県考古学協会
- 井鍋譽之 2003「東駿河の横穴式石室」「静岡県の横穴式石室」 静岡県考古学会
- 猪股喜彦 1998「国分古墳群」「山梨県史」資料編1 原始・古代1 山梨県
- 大谷宏治 2003「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鎌の変遷とその意義」「研究紀要」第10号 貢静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 大野巖夫 1985・86「岩橋千塚と周辺のT字形横穴式石室(上)(下)」「古代学研究」109・110 古代学研究会
- 小野正文 1999a「御坂町井之上の陶棺」「山梨県史」資料編2 原始・古代2 山梨県
- 小野正文 1999b「御坂町井之上の陶棺」「國學院大學考古学資料館紀要」第15輯 国学院大学考古学資料館
- 菊池吉修 2010「駿河」「東日本の無袖横穴式石室」 雄山閣
- 木ノ内義昭 1998「前壁状の封鎖施設を有する横穴式石室の意義」「静岡の考古学」 植松章八先生還暦記念論文集 『静岡の考古学』編集委員会
- 小林健二 2010「甲斐」「東日本の無袖横穴式石室」 雄山閣
- 小林広和・里村晃一 1975「甲斐国分寺周辺における後期古墳の様相」「古代学研究」77 古代学研究会
- 坂本美夫 1985「馬具」「考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社
- 志村 博 2003「富士市周辺の特異な石室構造」「静岡考古学研究」No.35 静岡県考古学会
- 鈴木一有 2010「駿河東部における無袖石室の史的意義」「東日本の無袖横穴式石室」 雄山閣
- 鈴木敏則 2001「古墳時代須恵器編年の再構築」「須恵器生産の出現から消滅」第5分冊 補遺・論考編
- 茅野市 1986「茅野市史」上巻 原始・古代
- 野田昭人 1990「長田古墳群(1、2、3号墳)」「山梨考古」第31号 山梨県考古学協会
- 土生田純之編 2010「東日本の無袖横穴式石室」 雄山閣
- 平林大樹 2013「信濃における後期・終末期副葬鎌の変遷」「物質文化」93 物質文化研究会
- 富士市教育委員会 1988「富士市の文化財(古墳編)」
- 藤森栄一 1939「考古学上よりしたる古墳墓立地の觀方 一信濃諭訪地方古墳の地域的研究一」「考古学」第10卷第1号 東京考古学会
- 御坂町・御坂町教育委員会 1992「御坂町の地名考」
- 御坂町教育委員会 2004「長田古墳群」 御坂町教育委員会埋蔵文化財概要報告書h 16-2
- 水野敏典 2003「鉄鎌にみる後期古墳の諸段階」「シンポジウム 後期古墳の初段階」 第8回東北・関東前方後円墳研究会大会発表要旨資料
- 三珠町教育委員会 1993「一条氏館跡遺跡」—第4次調査報告—
- 宮澤公雄 1989「後期古墳から観た甲府盆地の様相」「山梨考古学論集」II 山梨県考古学協会
- 宮澤公雄 1991「御坂町長田古墳群の調査」「帝京大学山梨文化財研究所報」第12号 帝京大学山梨文化財研究所
- 宮澤公雄 1998「長田古墳群」「山梨県史」資料編1 原始・古代1 山梨県

- 向坂剛二 1990「恩塚山A7号墳」『静岡県史』資料編2 考古2 静岡県
山梨教育会東八代支会 1914『東八代郡誌』
山梨県考古学協会 1992『山梨考古』長田古墳群見学会特集号
山梨県教育委員会 1978『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』一北巨摩郡双葉町地内1—
山梨県教育委員会 1979『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』一北巨摩郡双葉町地内・中巨摩
郡竜王町地内—
山梨県教育委員会 1985『四ツ塚古墳群』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第11集
山梨県教育委員会 1987『二之宮遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第23集
山梨県教育委員会 1987『姥塚遺跡・姥塚無名墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集
山梨県教育委員会 1987『岩清水遺跡・考古博物館構内古墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第
30集
山梨県教育委員会 1988『稲荷塚古墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第38集
山梨県教育委員会 1999『南西田遺跡・西林遺跡・四ツ塚古墳群』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
第162集
山梨県教育委員会 2000『平林2号墳』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第175集
山梨大学考古学研究会 1974『国分墓地一号墳』 ——宮町群集墳の調査—

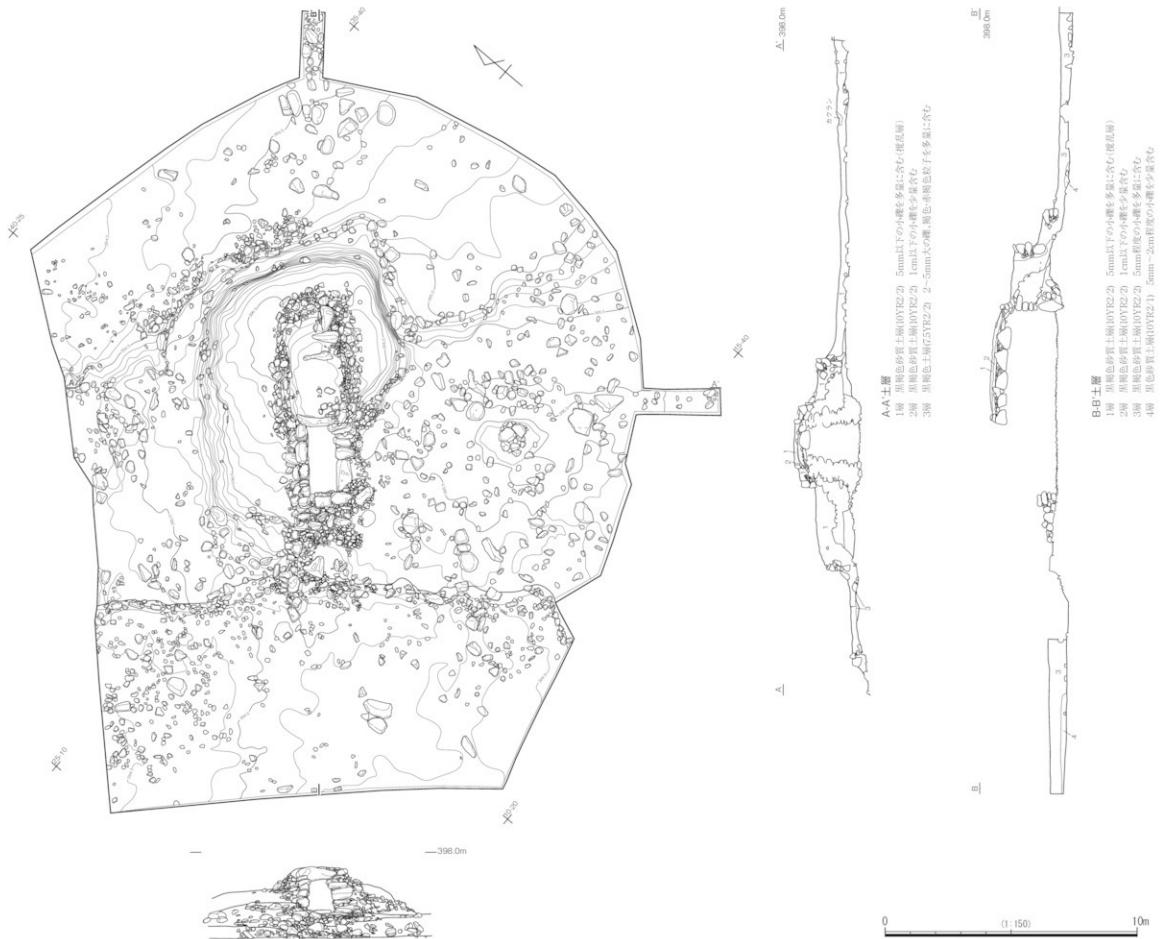
おわりに

1989年、当時の御坂町教育委員会による長田古墳群の調査が始まったばかりの頃、古墳を見学させていただいたいことがあったが、ちょうど本墳の調査を実施しているところであった。その後、御坂町教育委員会、金川工業団地遺跡調査会が古墳群全体を調査することとなったが、調査会の一員に加えていただき、13基ほどの古墳の発掘調査を担当した。二十数年を経て、再度長田古墳群の調査を行うなどとはまったく予想だにしていなかったが、今回発掘調査を行う機会を得た。

本墳は、長田古墳群中において残存状況がもっとも良好であったといえ、墳丘はほとんど残らず、石室も奥壁寄りは天井石が残存するものの、入口側半分ほどは崩落していた。反面、石室内は奥壁付近の一部が擾乱を受けていたが、それほど荒らされた形跡は認められず、土器類、直刀、鉄鎌、馬具類、装身具をはじめとする多くの遺物が出土したことは予想外であった。

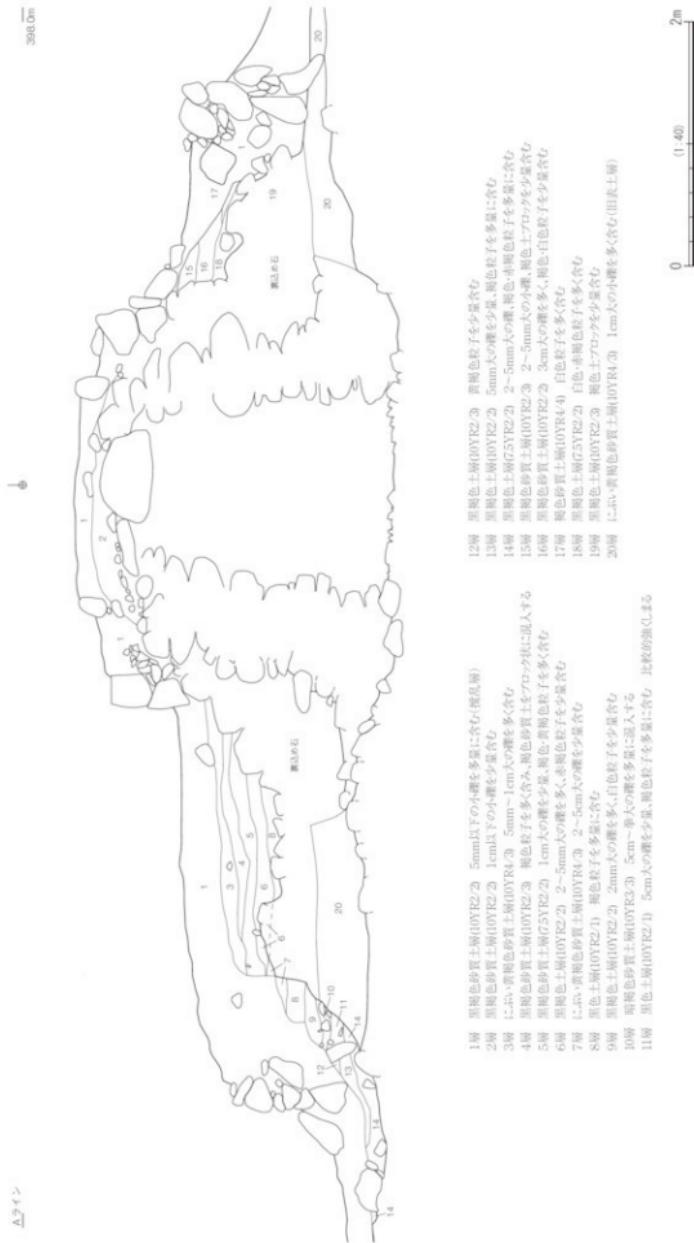
須恵器をはじめとした出土遺物から、本墳は6世紀後半でも比較的早い段階に築造されたものと考えられ、古墳群の造営が本墳の築造をもって開始されたことが明らかとなった。また、数多くの古墳が点在する金川扇状地上に立地する横穴式石室墳の中でも、弾薬窟古墳などに次いで比較的古い段階の築造であることも想定されるなど、大きな成果を上げることが出来た。今後、長田古墳群の調査成果をまとめ、甲府盆地における本古墳群の位置づけを行うこととしたい。

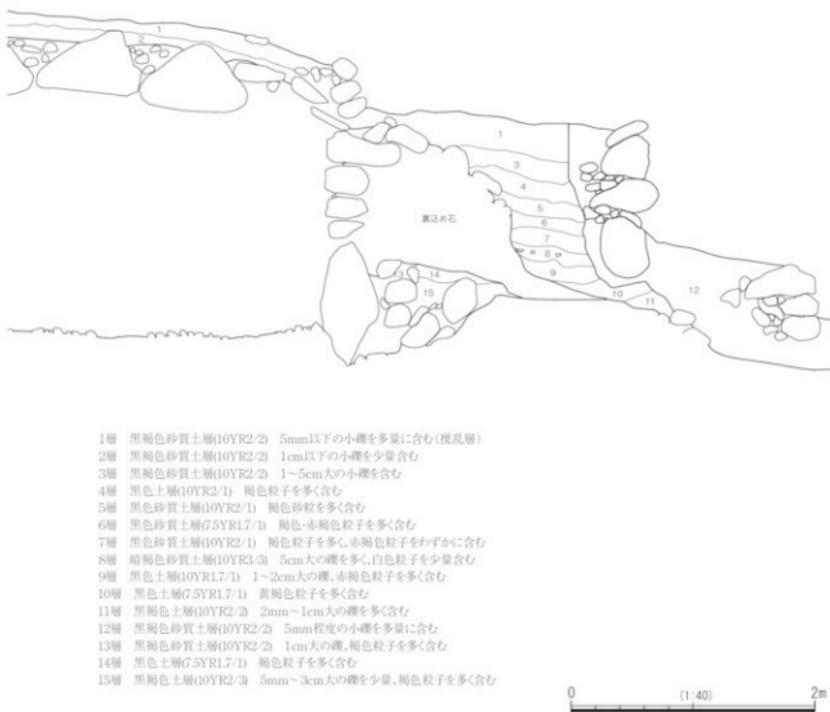
最後になりましたが、発掘調査および報告書刊行に向けた整理作業にあたり、ご協力いただきました機関・各位、ならびに作業に従事していただいた方々に対し、お礼申し上げます。



第5図 古墳全体図

第6図 増丘セクション図(1)

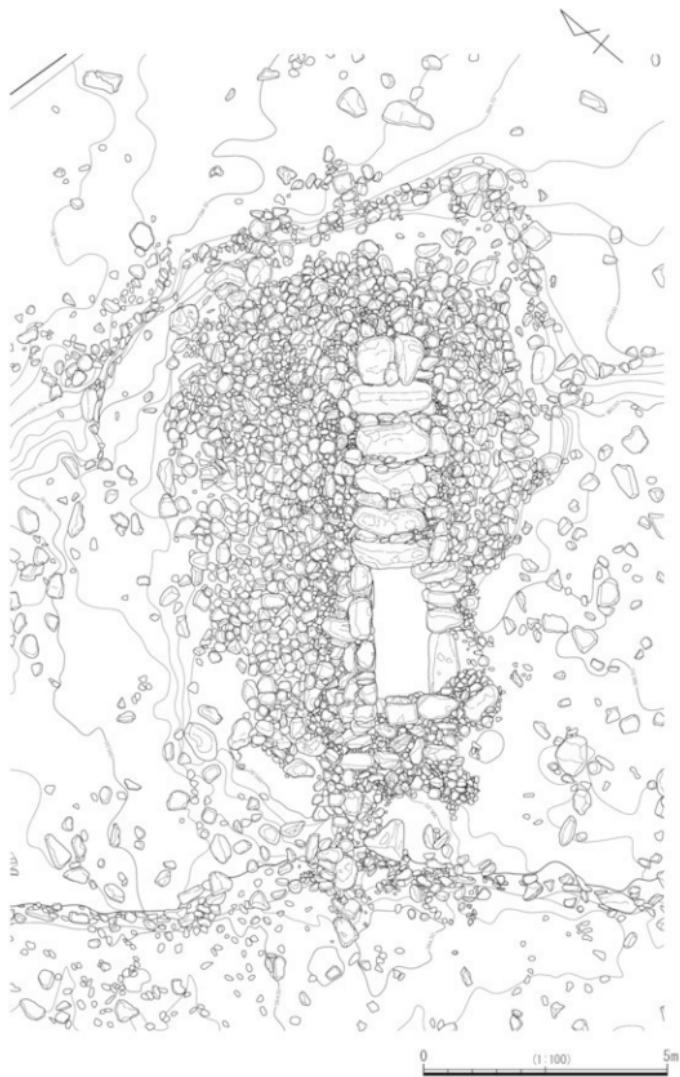




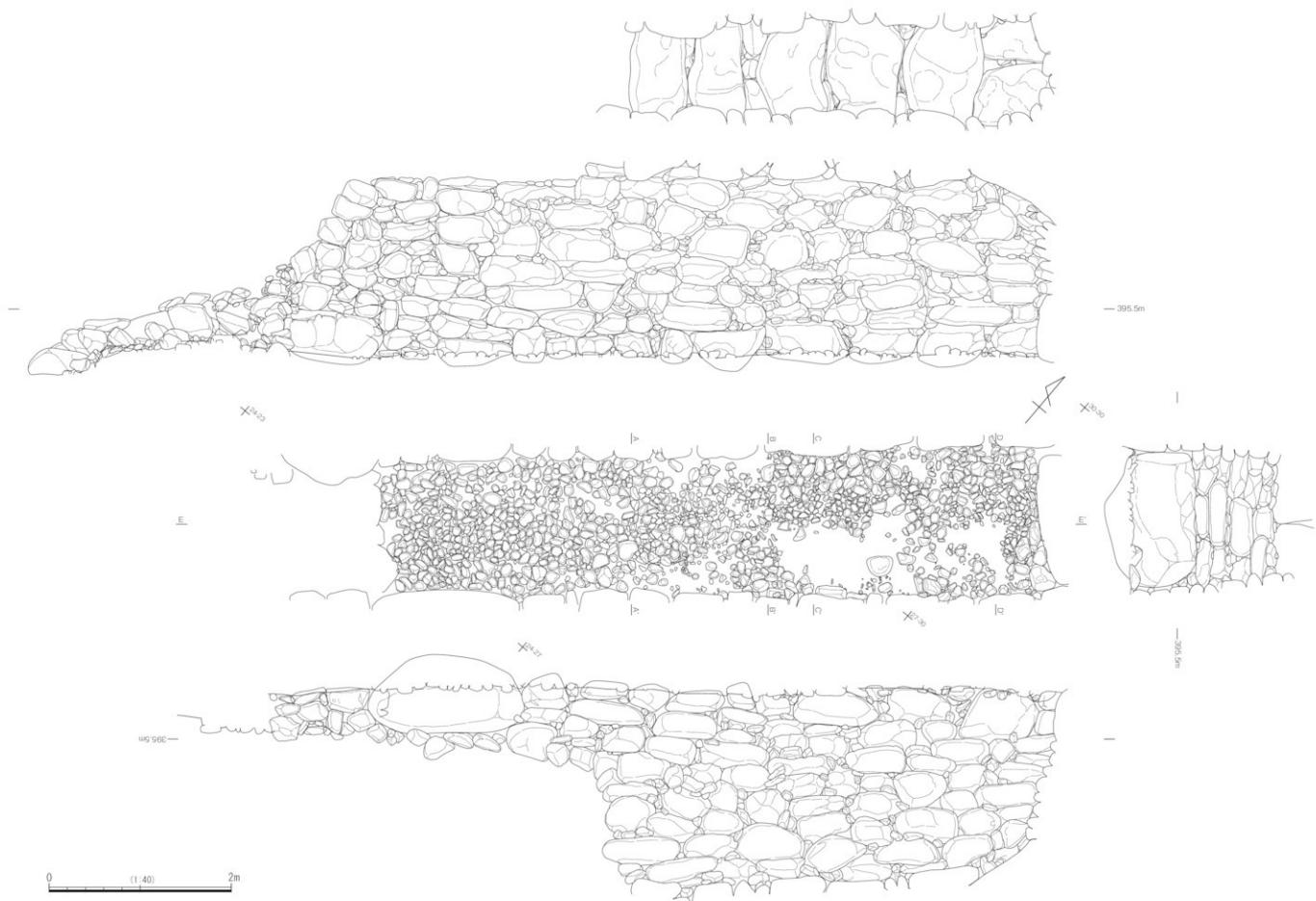
第7図 塡丘セクション図(2)



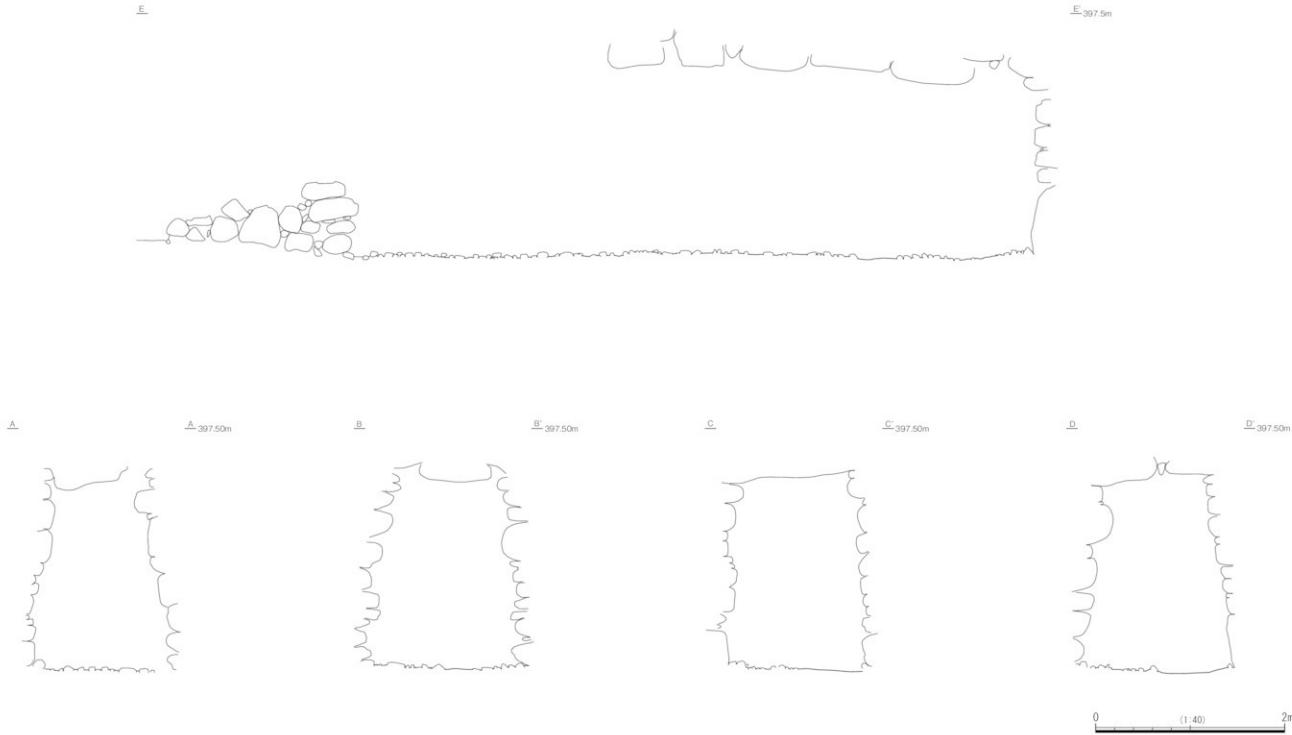
第8図 盛土除去平面図(1)



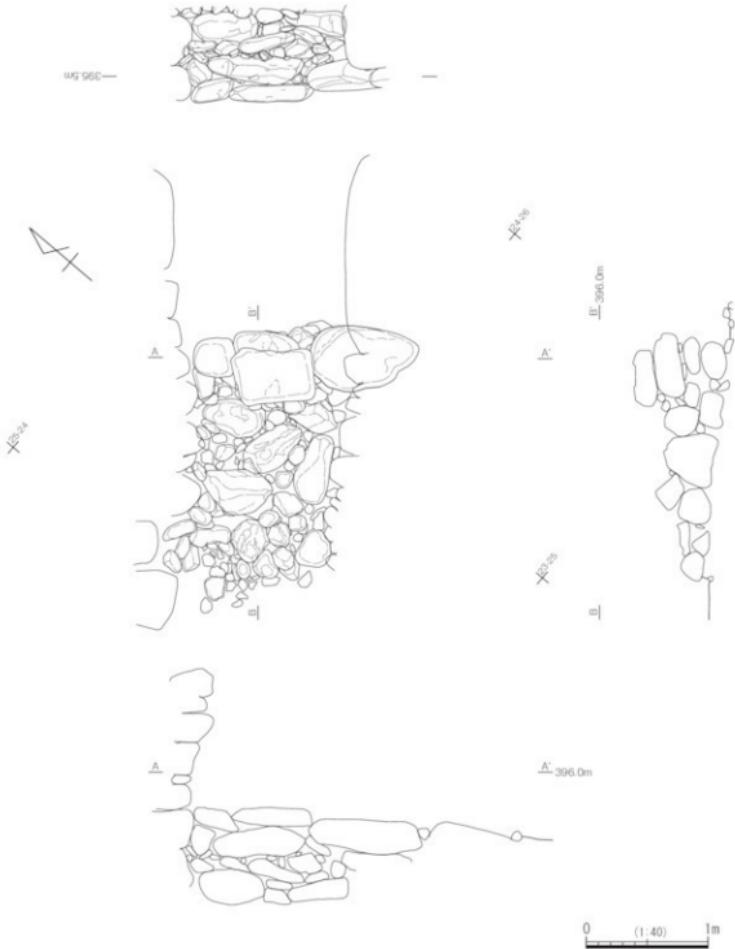
第9図 盛土除去平面図(2)



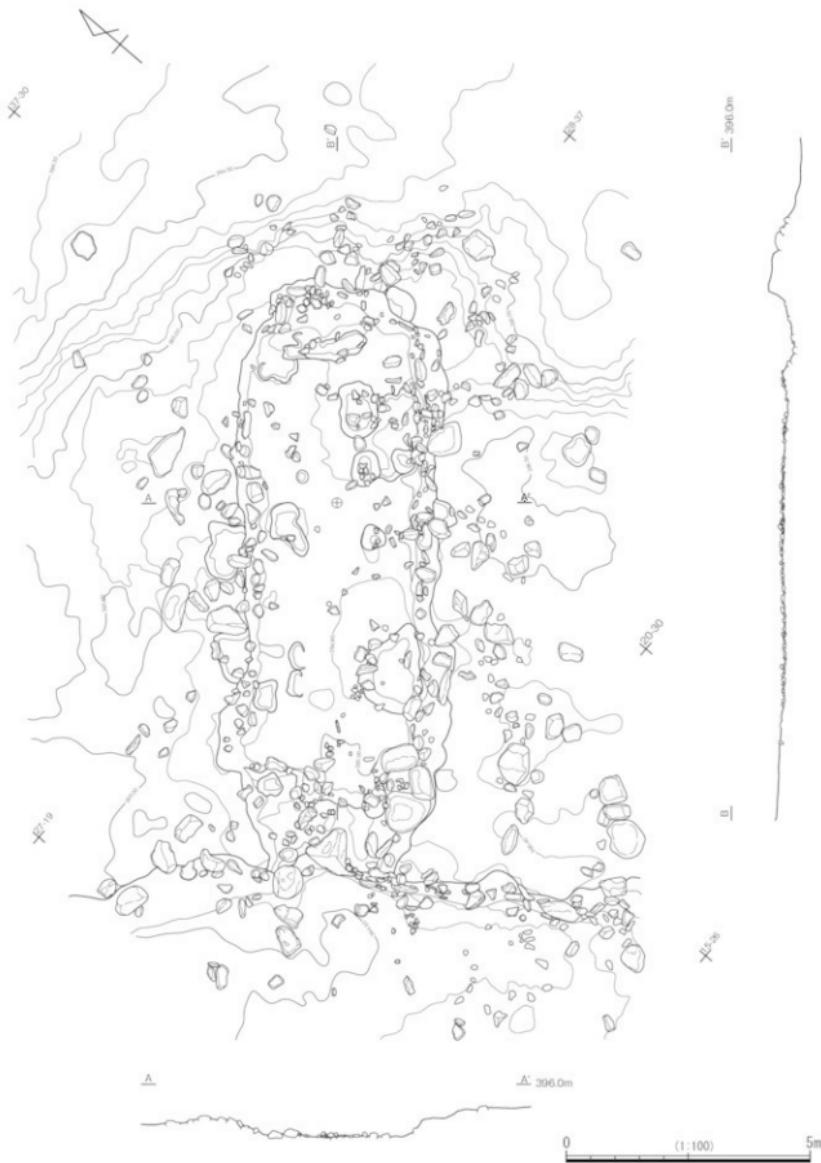
第10図 石室展開図



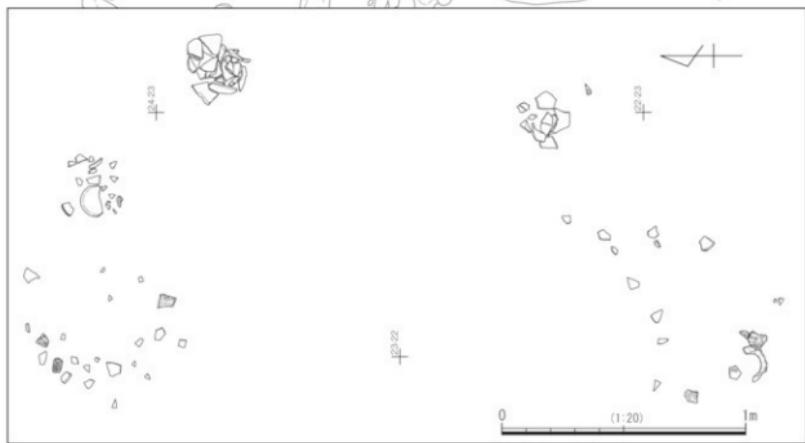
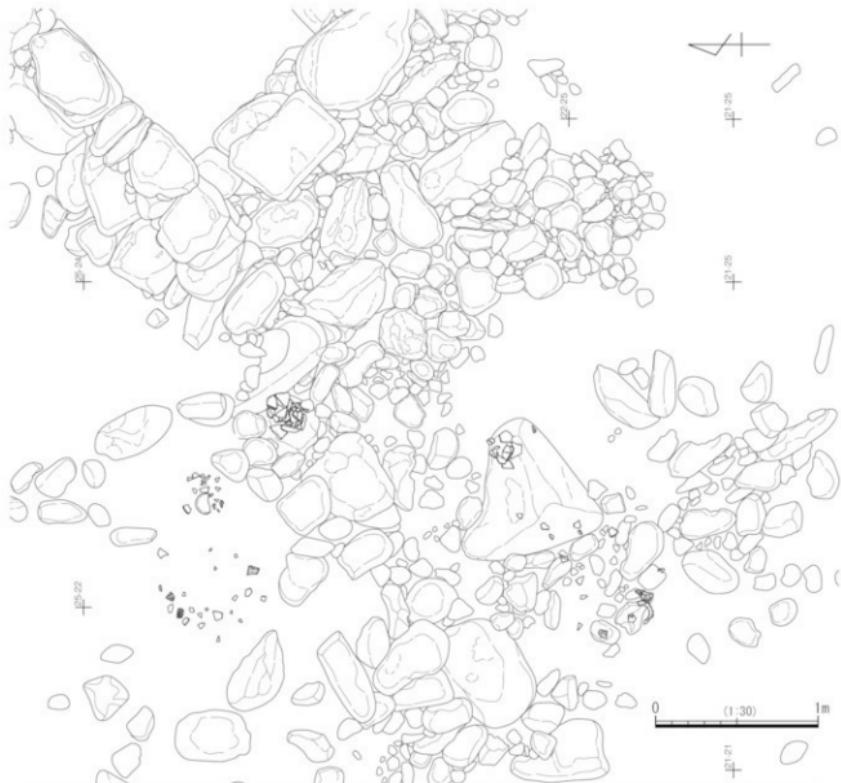
第11図 石室断面図



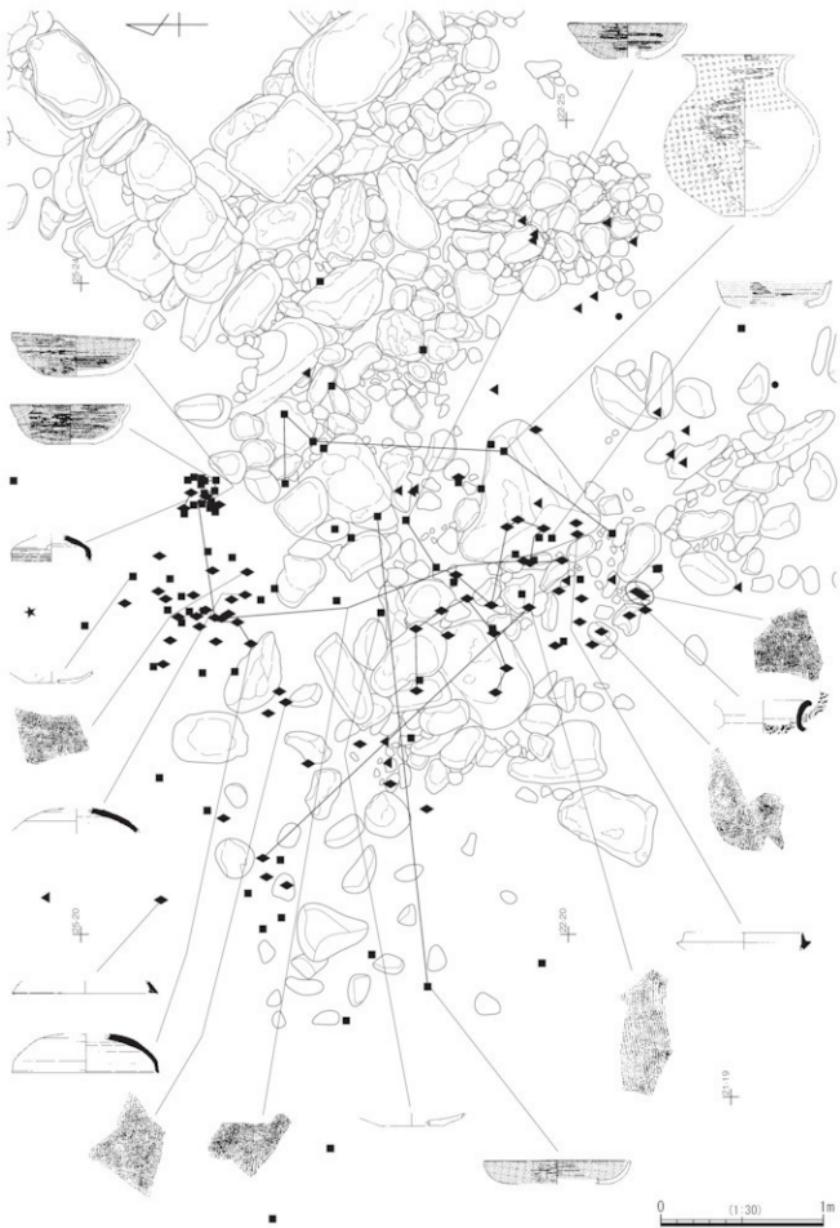
第12図 閉塞石



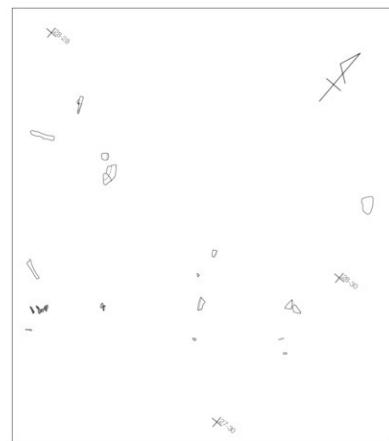
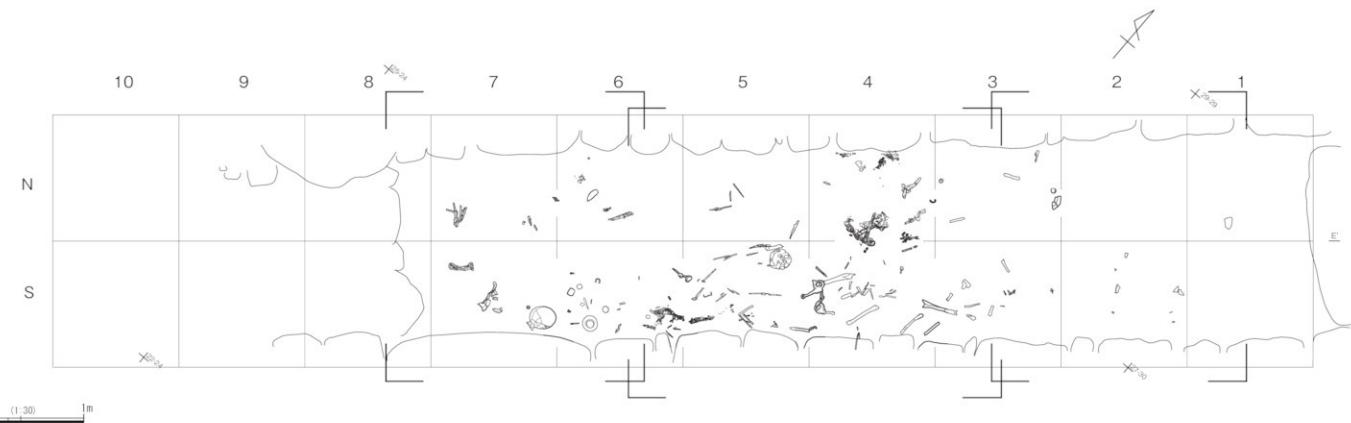
第13図 石室掘り方



第14図 前庭部遺物出土状況(1)

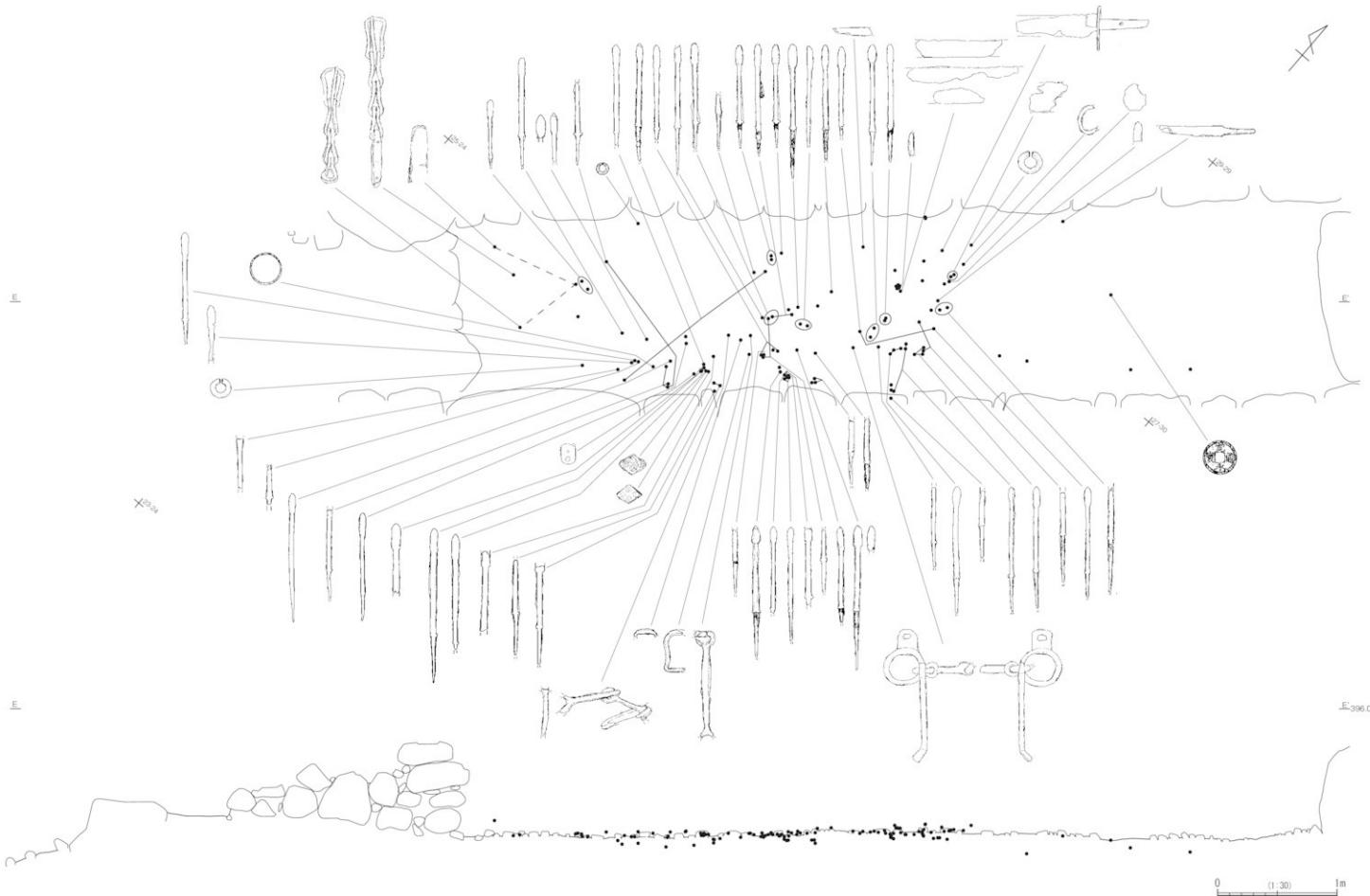


第15図 前庭部遺物出土状況(2)

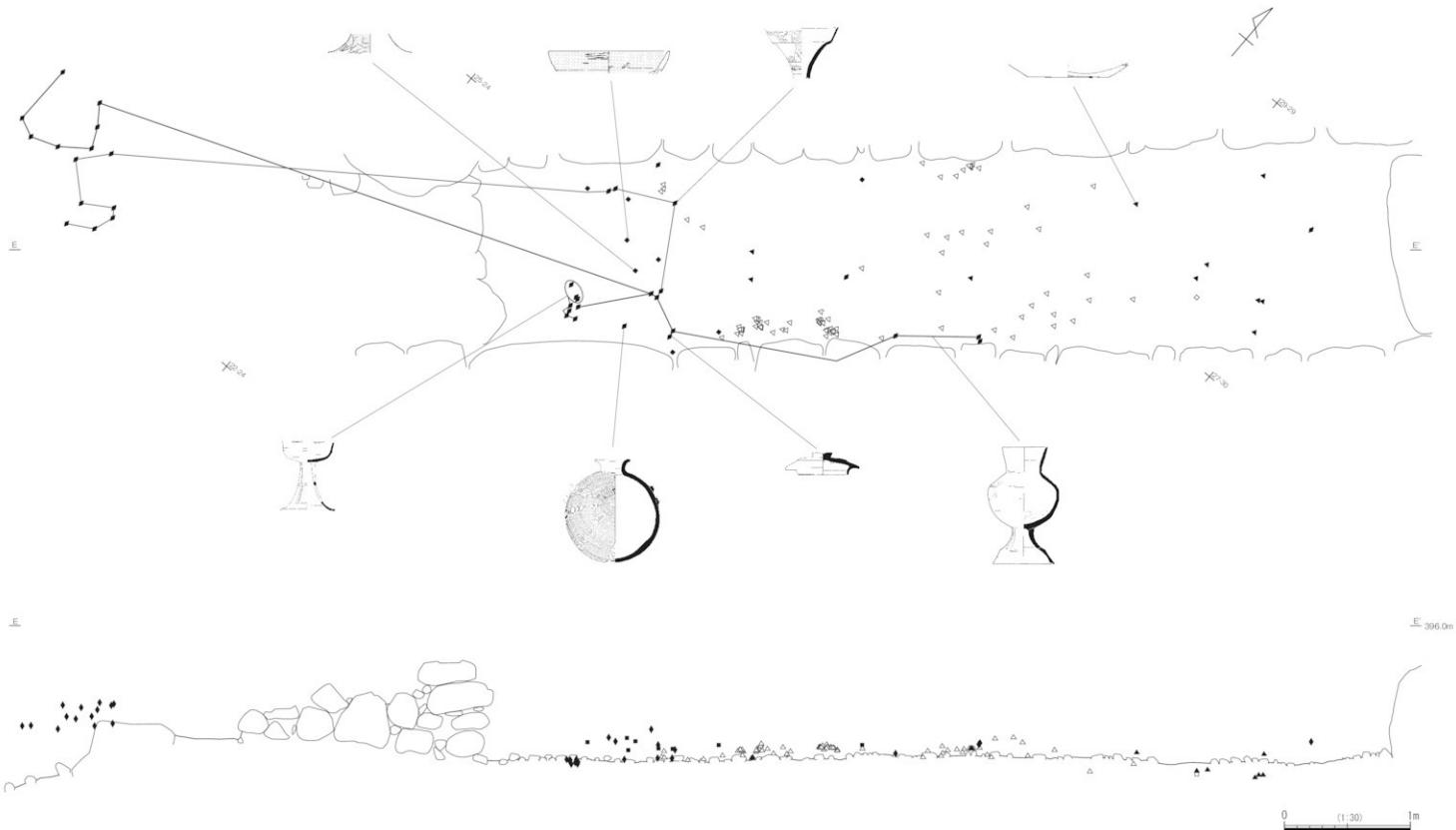


0 (1:20) 1m

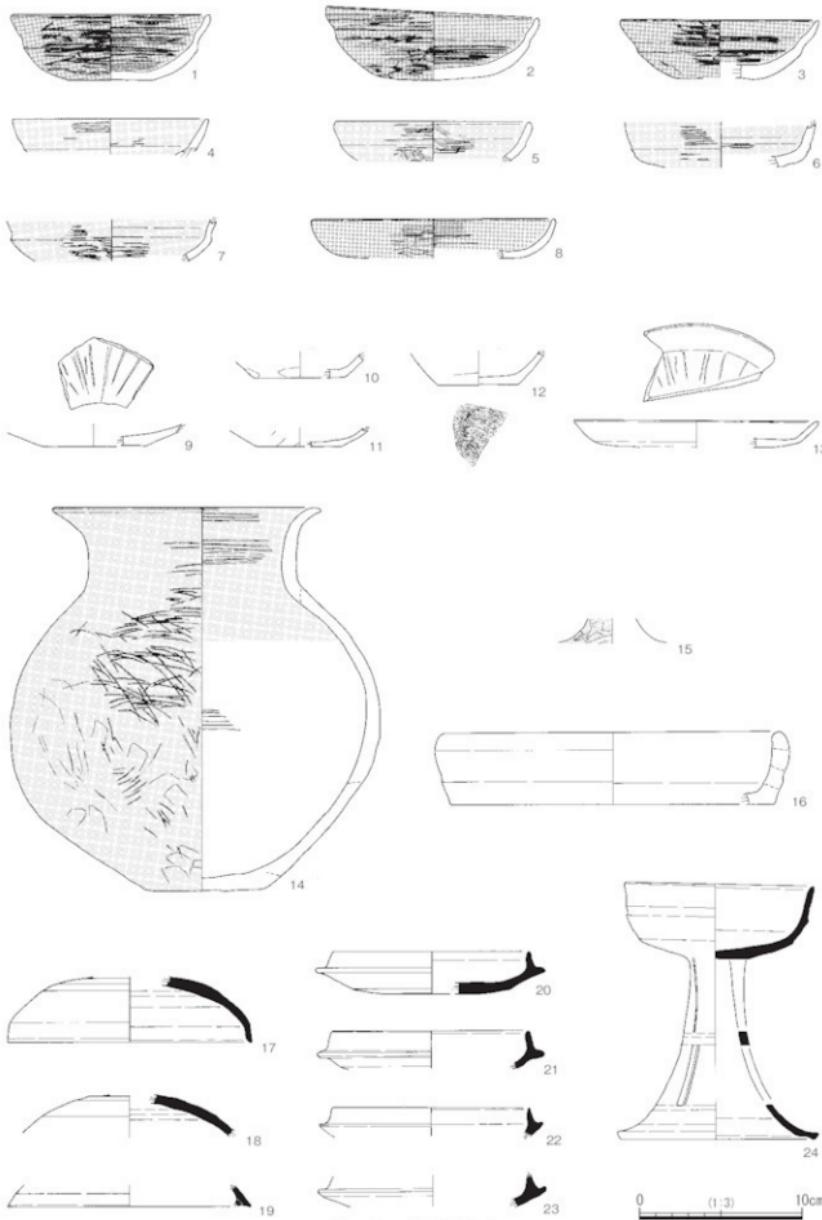
第16図 主体部遺物出土状況



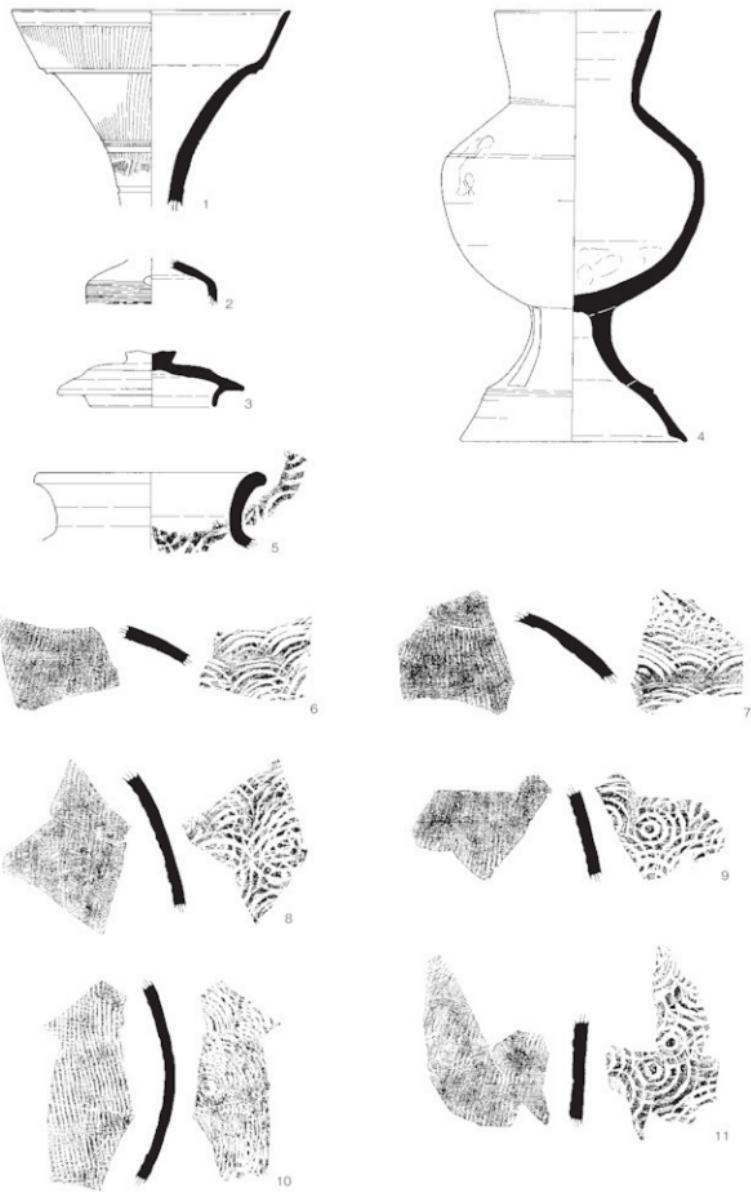
第17図 石室内遺物出土状況(金属)



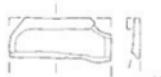
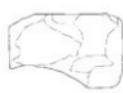
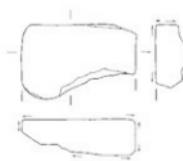
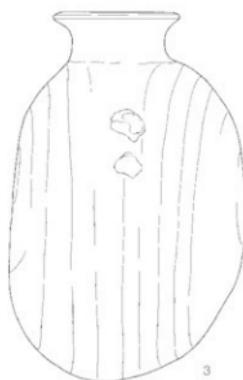
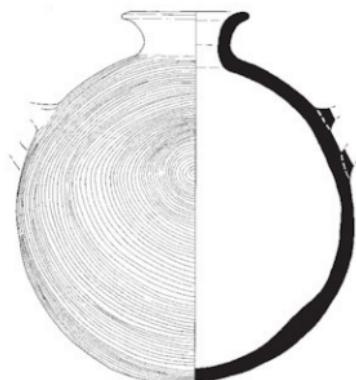
第18図 石室内遺物出土状況(土器・人骨)



第19図 出土遺物(1)

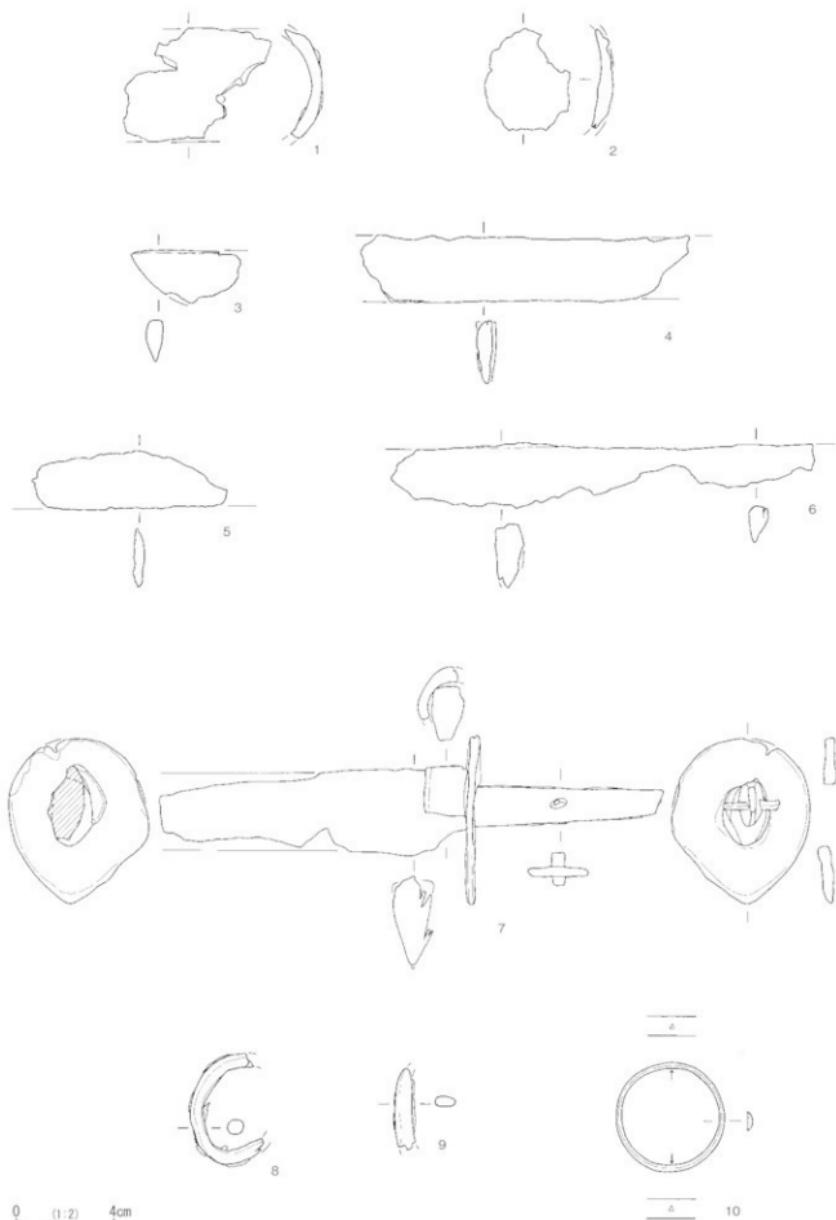


第20図 出土遺物(2)

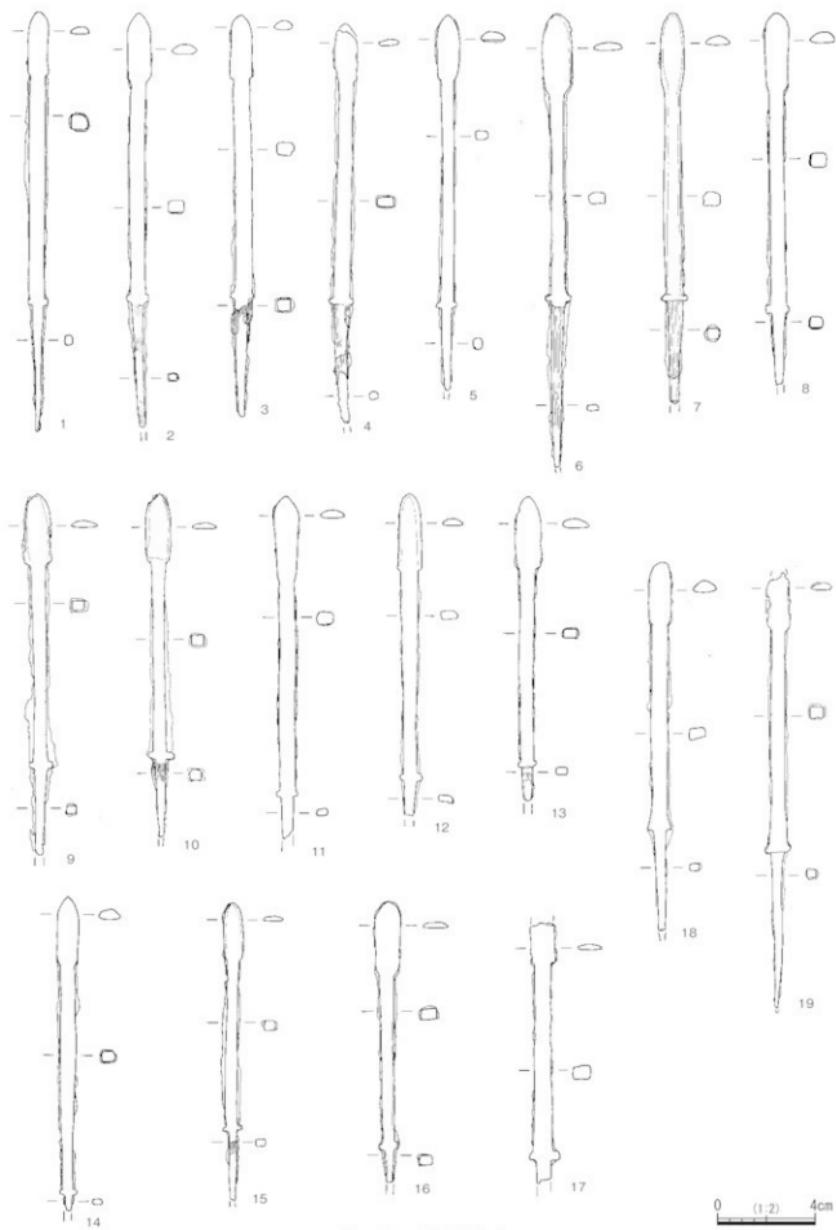


0 (1:3) 10cm

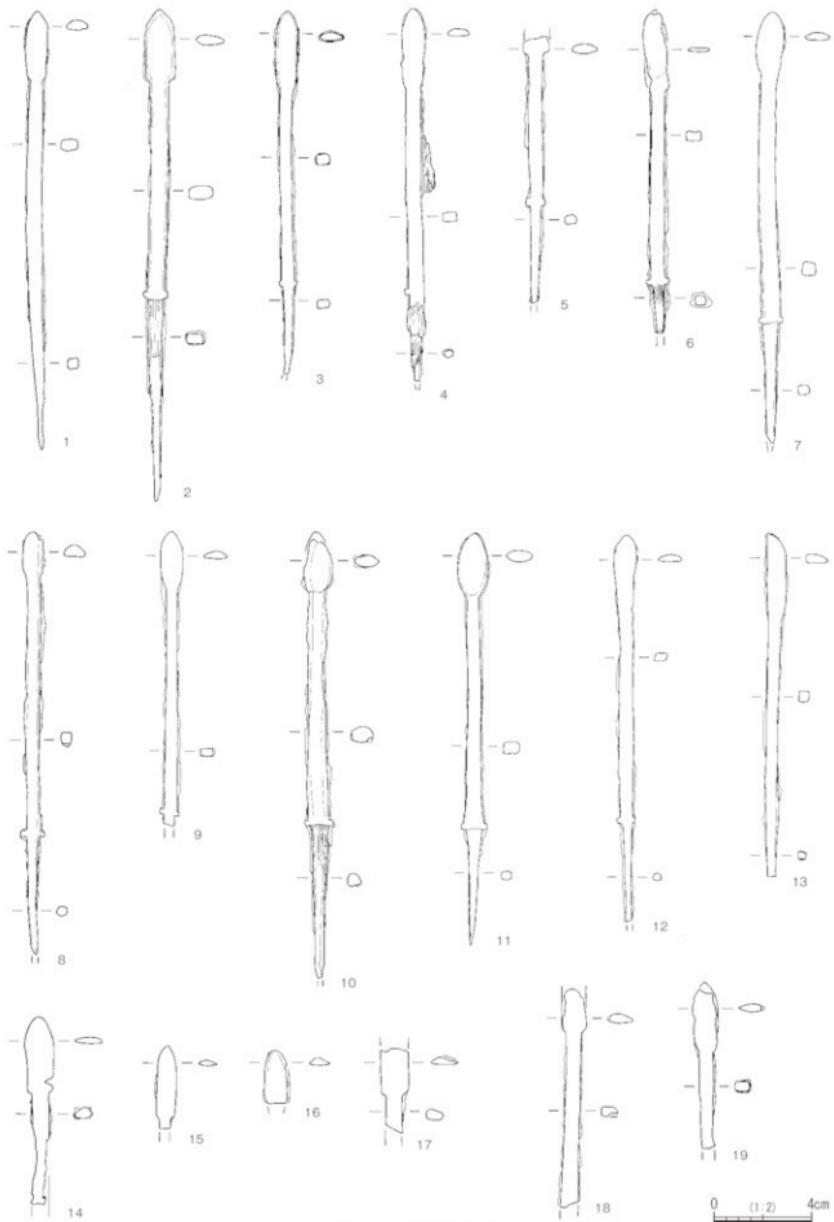
第21図 出土遺物(3)



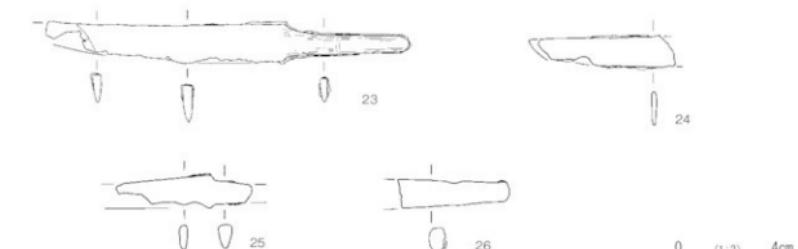
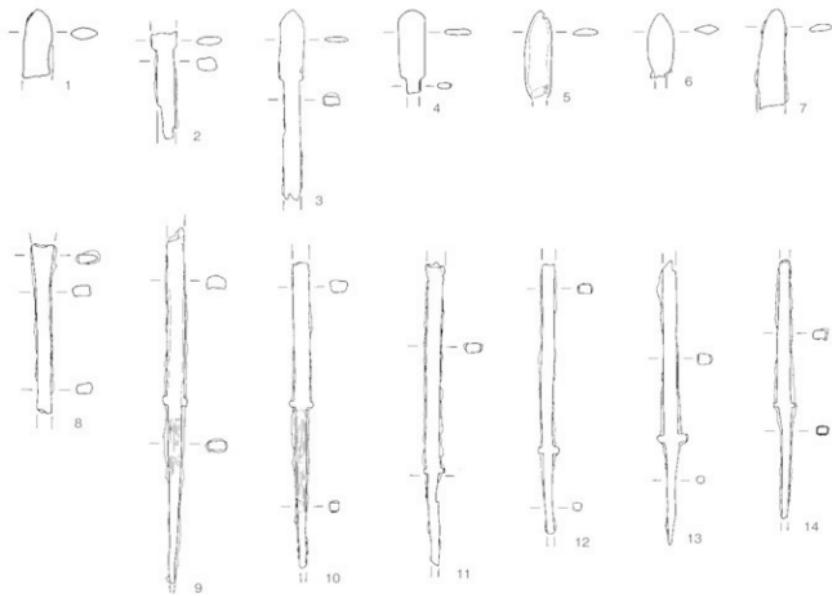
第22図 出土遺物(4)



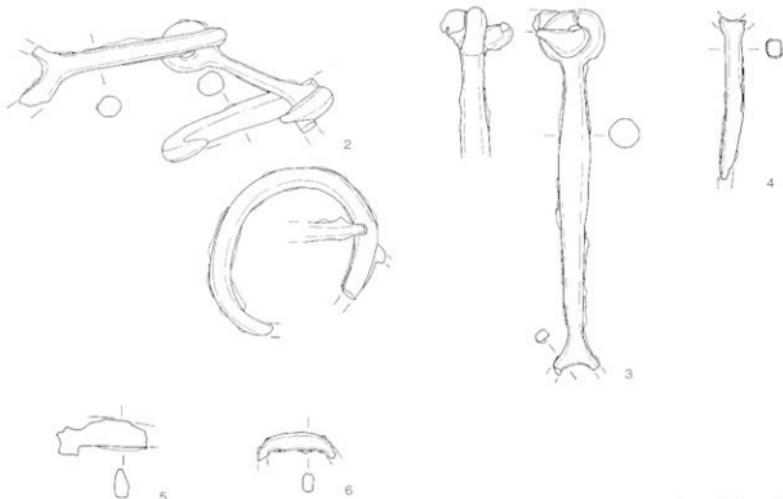
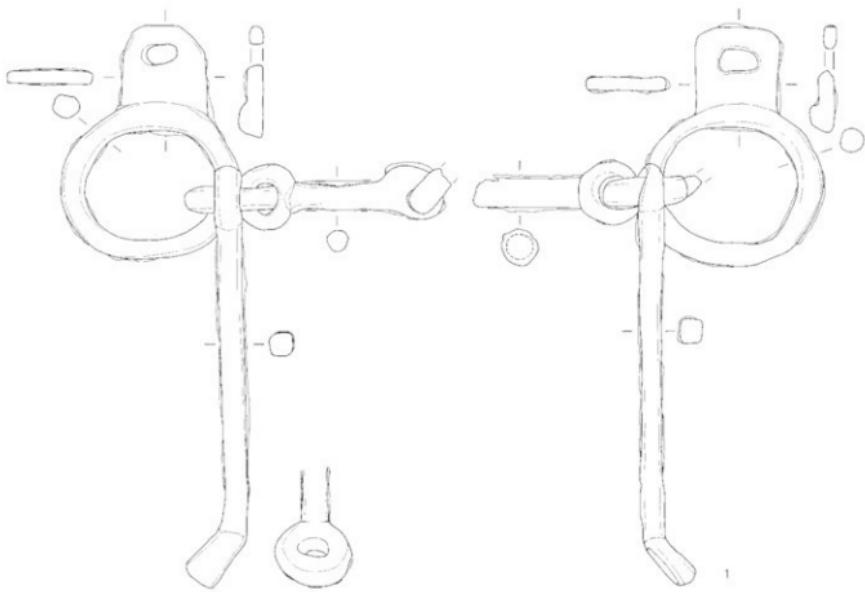
第23図 出土遺物(5)



第24図 出土遺物(6)

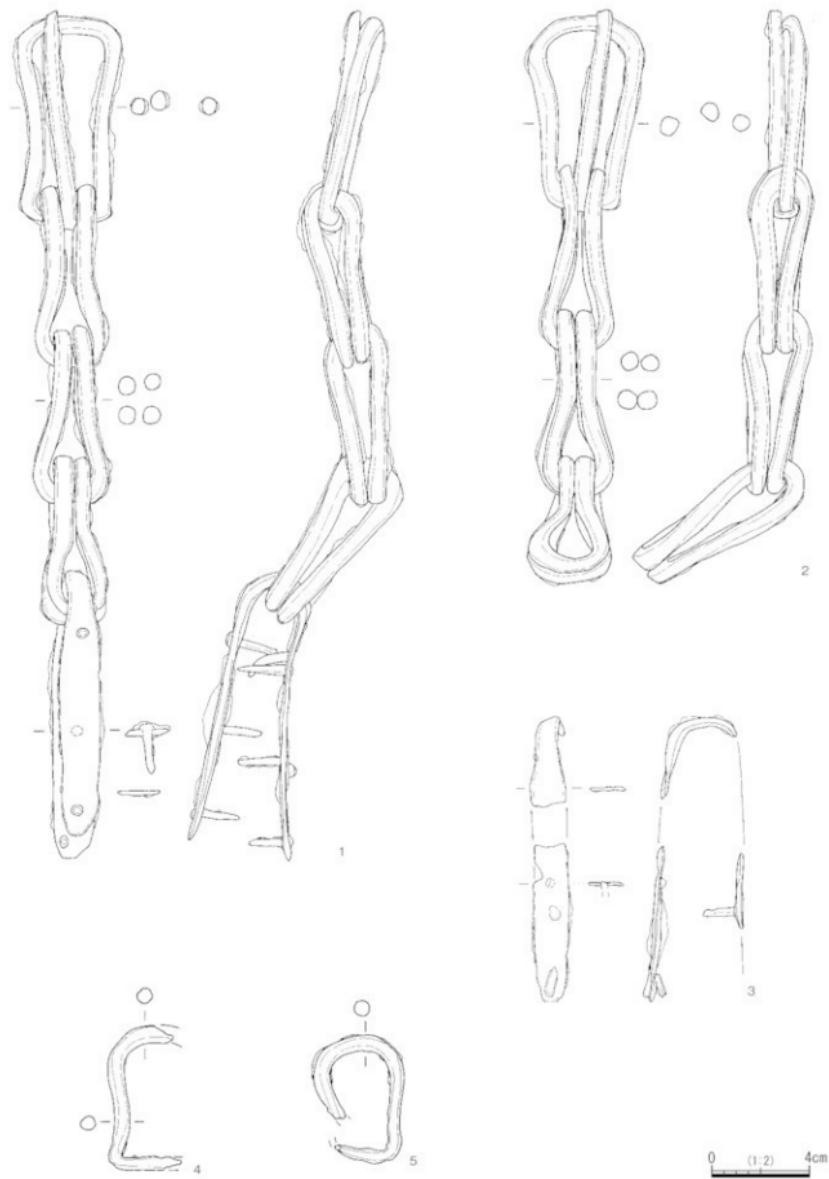


第25図 出土遺物(7)

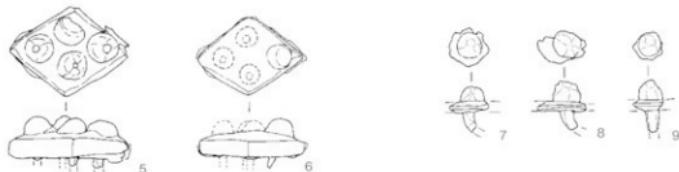
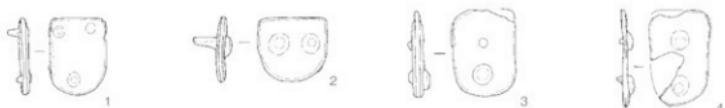


0 (1:2) 4cm

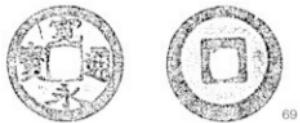
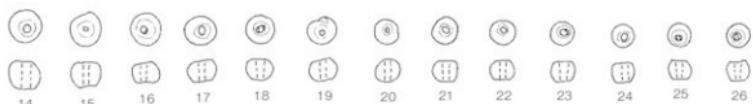
第26図 出土遺物(8)



第27図 出土遺物(9)



0 (1:2) 4cm



0 (1:1) 2cm

第28図 出土遺物(10)



1. 長田古墳群航空写真(1)(第1次調査)



2. 長田古墳群航空写真(2)(第1次調査)

図版 2



1. 調査開始前(1)(第1次調査)



2. 調査開始前(2)(第1次調査)



1. 除草後（東より）



2. 除草後（北より）



3. 除草後（西より）



4. 除草後（南より）



5. 古墳全景(1)

図版 4



1. 古墳全景(2)



2. 填丘頂部盛土状況



3. 填丘頂部盛土断面



4. 填丘東側盛土断面



5. 填丘西側盛土断面



1. 盛土除去後(1)



2. 盛土除去後(2)



1. 石室内部



2. 左側壁(1)



3. 左側壁(2)



4. 右側壁



5. 床面



1. 閉塞石



2. 閉塞石内側



3. 閉塞石除去後



4. 奥壁裏込め断面



5. 右側壁裏込め断面



6. 左側壁裏込め断面



7. 奥壁裏側検出状況



8. 右側壁裏側検出状況

図版 8



1. 左側壁裏側検出状況



2. 前庭部遺物出土状況(1)



3. 前庭部遺物出土状況(2)



4. 前庭部遺物出土状況(3)



5. 前庭部遺物出土状況(4)



6. 前庭部遺物出土状況(5)



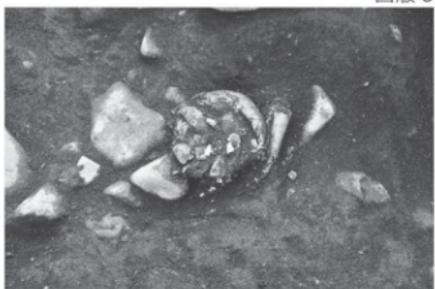
7. 石室内遺物出土状況(1)



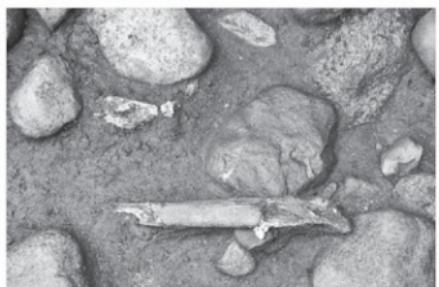
8. 石室内遺物出土状況(2)



1. 石室内遺物出土状況(3)



2. 石室内遺物出土状況(4)(第1次調査)



3. 石室内遺物出土状況(5)



4. 石室内遺物出土状況(6)



5. 石室内遺物出土状況(7)



6. 石室内遺物出土状況(8)



7. 石室内遺物出土状況(9)



8. 石室内遺物出土状況(10)(第1次調査)

図版 10



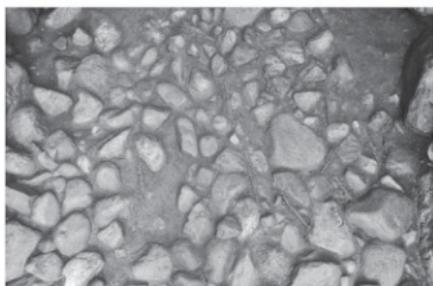
1. 石室内遺物出土状況(11)



2. 石室内遺物出土状況(12)



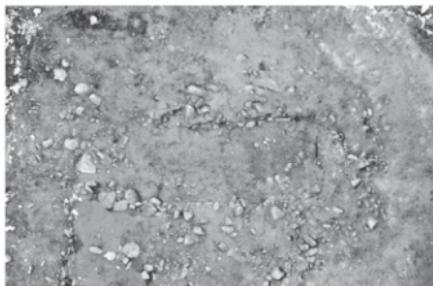
3. 石室内遺物出土状況(13)



4. 石室内遺物出土状況(14)



5. 石室掘り方(1)



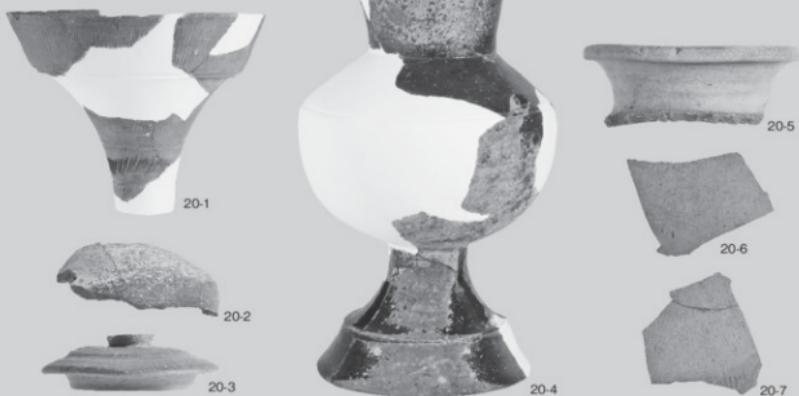
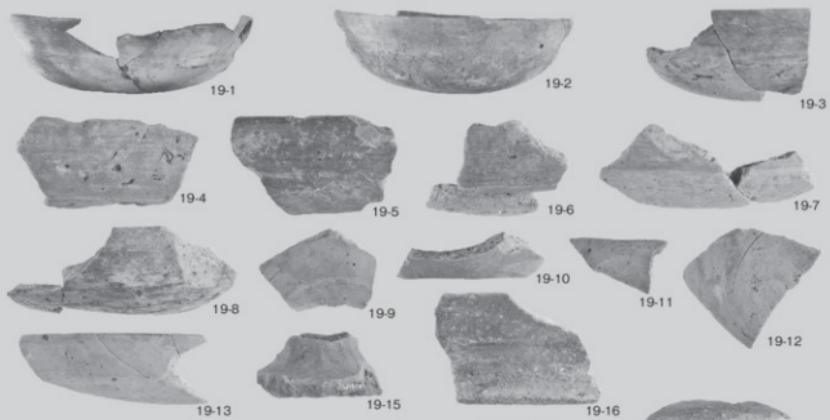
6. 石室掘り方(2)



7. 調査風景



8. 石室内調査風景

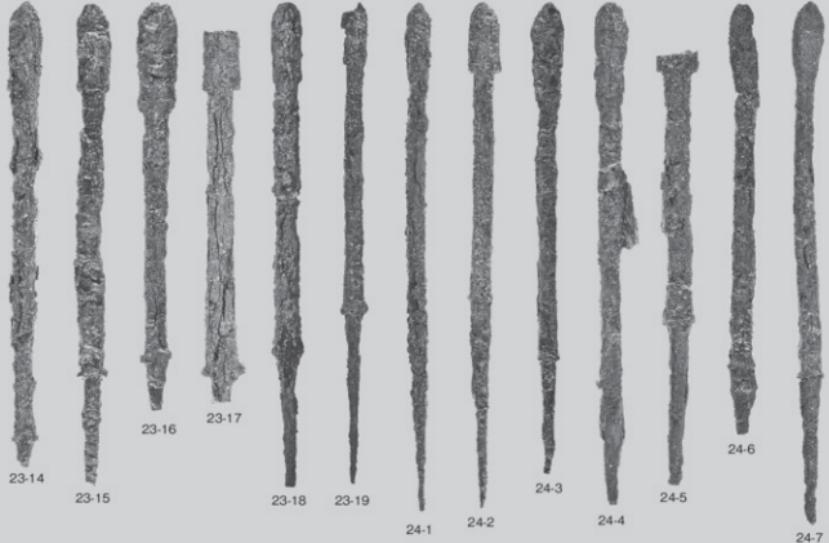
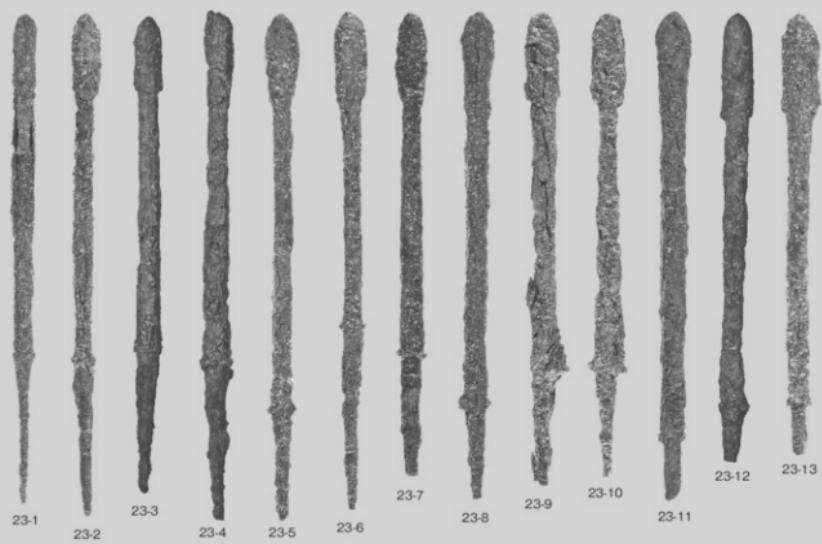


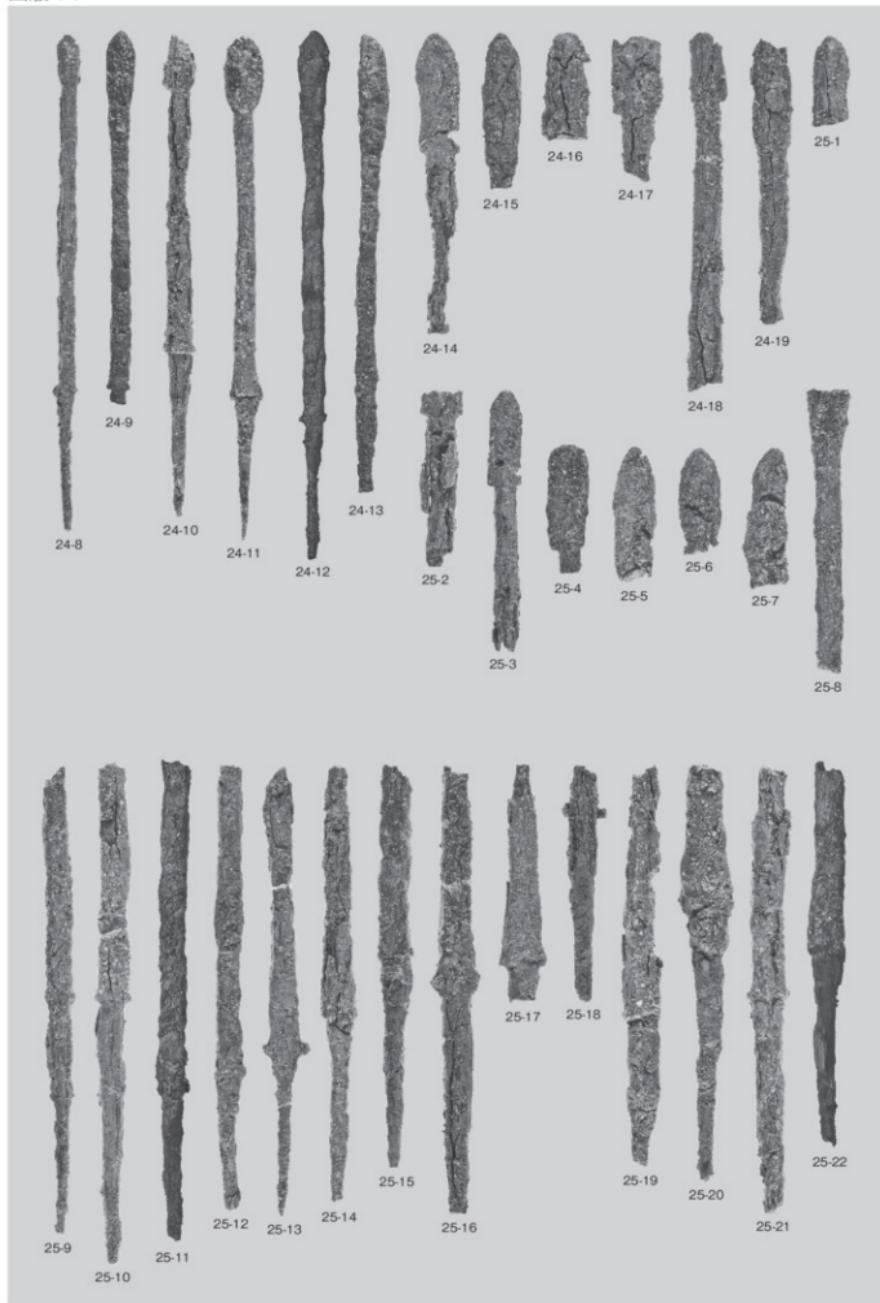
出土遺物（1）

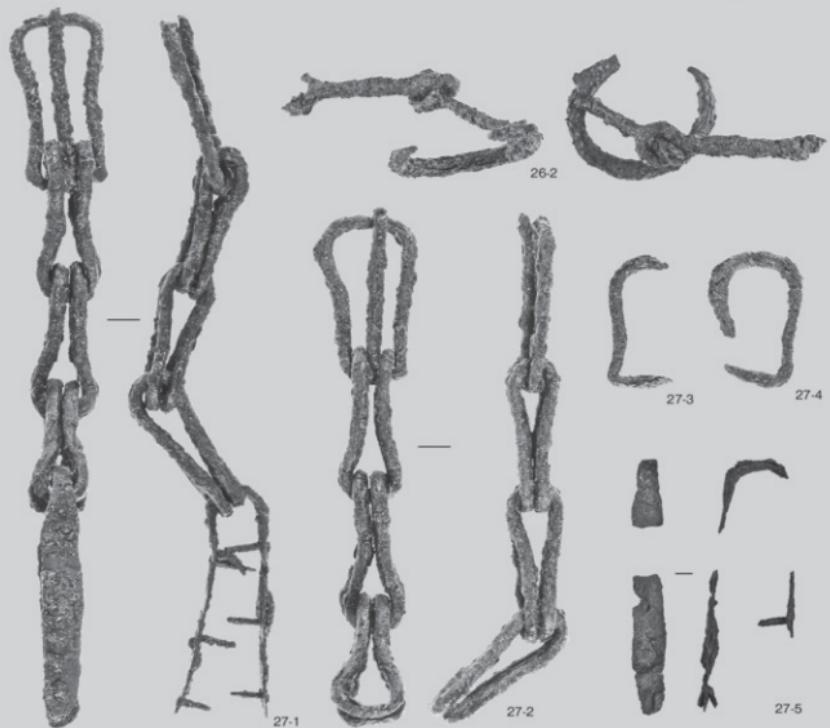
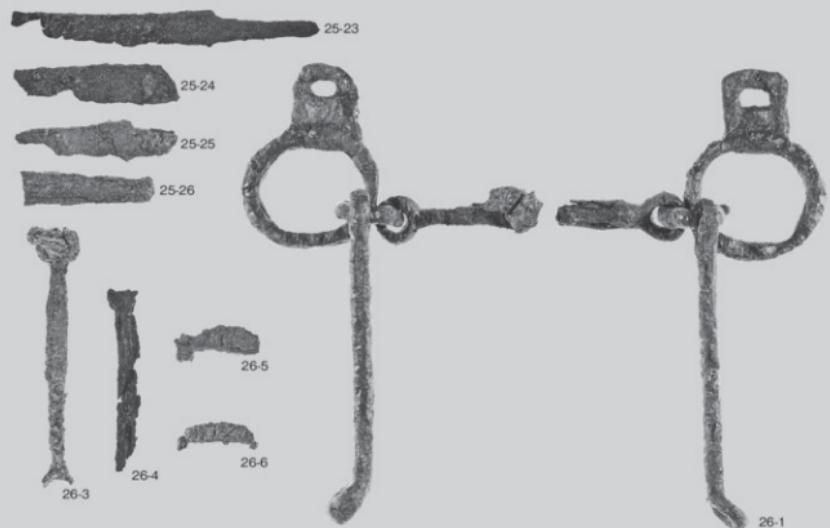
図版 12



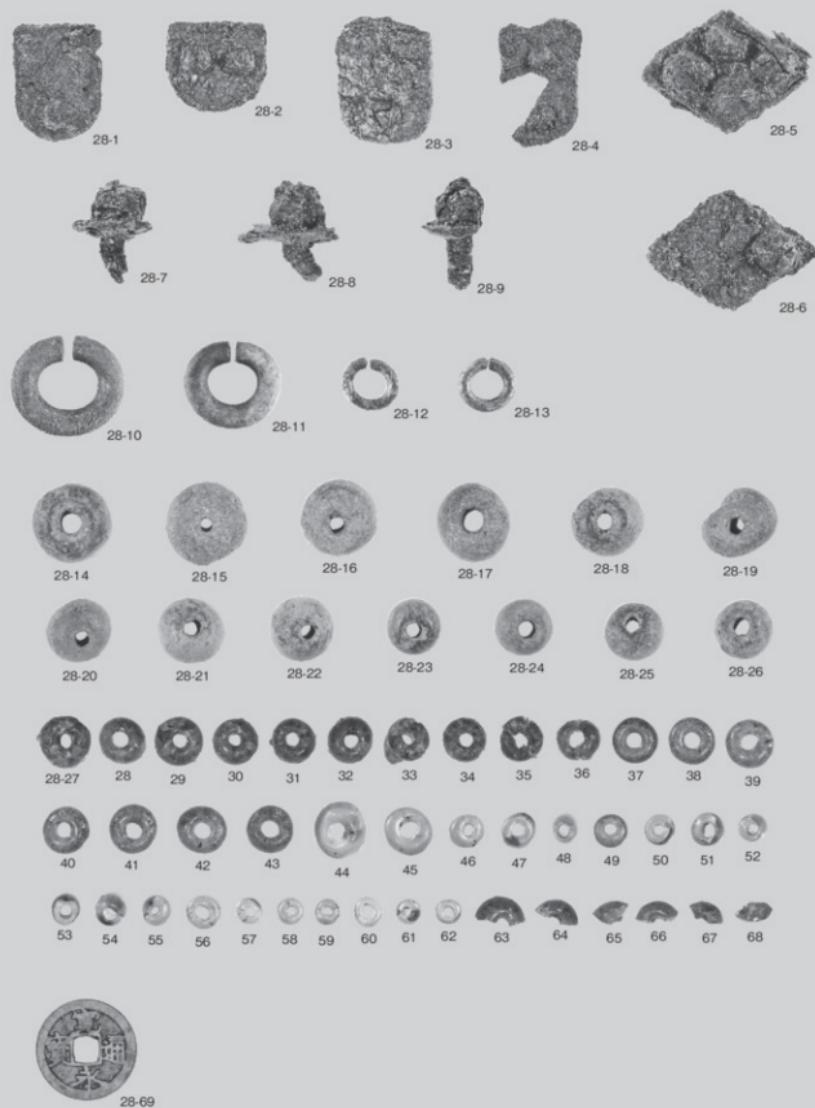
出土遺物（2）







出土遺物（5）



長田1号墳発掘調査報告書抄録

ふりがな	ちょうた1ごうふん
書名	長田1号墳
副書名	駐車場建設に伴う発掘調査
シリーズ名	笛吹市文化財調査報告書
シリーズ番号	30
著者名	宮澤公雄
発行者	有限会社アール・エス・ビジネス 笛吹市教育委員会 公益財団法人山梨文化財研究所
編集機関	公益財団法人山梨文化財研究所
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2 TEL055-263-6441
印刷日	2014年3月25日
発行日	2014年3月31日
所在地	山梨県笛吹市御坂町下黒駒1577番地-2
地図名	25,000分の1地形図 石和
位置	北緯35度37分39秒、東経138度40分57秒
標高	395m
市町村コード	19211
調査原因	駐車場建設
調査期間	1988年11月1日～(第1次調査)、2011年5月8日～6月20日(第2次調査)
調査面積	400 m ²
遺跡概要	主な時代 古墳時代
	主な構造 横穴式石室墳
	主な遺物 土器(土師器・須恵器)、武器(直刀・鉄鎌)、馬具(轡・鎧・飾り金具)、装身具(金環・土製丸玉・ガラス小玉)

長田1号墳
—駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2014年3月25日 印刷
2014年3月31日 発行

編 集 公益財団法人山梨文化財研究所
山梨県笛吹市石和町四日市場1566-2 Tel.055-263-6441

発 行 有限会社アール・エス・ビジネス
笛吹市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所
